



全国こどものまちサミット in 静岡 2015

【開催日】 10月11日（日）、12日（月・祝）

【会場】 静岡市こどもクリエイティブタウン ま・あ・る
4階 なんでもホール

● ご参加者			
・ご参加団体数	30 団体（個人参加除く）		
・ご参加者数	10月11日	大人 103 人 小人 28 人 計 131 人	10月12日 大人 110 人 小人 52 人 計 162 人
2日間の総計		大人 213 人 小人 80 人	

主催 静岡市

運営 静岡市こどもクリエイティブタウン ま・あ・る 指定管理者 (株) 丹青社

全国こどものまちサミット in 静岡 スケジュール

10/11日（日）

【会場】 静岡市こどもクリエイティブタウン
4階 なんでもホール

13:00～13:15

● 開会

主催者挨拶 静岡市副市長 山本 克也

静岡市教育長 高木 雅宏

開会宣言 ま・あ・る 館長 井野 恵

13:15～14:00

● 講演 「こどものまち」から「子どもにやさしいまち」を創造する ～遊び・仕事と産業～

講演者 UNICEF Child Friendly Cities International Advisory Board

ユニセフ子どもにやさしいまち国際諮問委員会委員

千葉大学大学院 園芸学研究科・教授 木下 勇

14:00～14:30

● 「ま・あ・る “こどもバザール” の紹介」 ま・あ・る 副館長 小澤 京子

● 「こどものまちの取組紹介」

14:30～14:50 こどもがつくるまち「Piccoli せんだい」 NPO ピコせんサポーター事務局

14:50～15:10 エンジョイスミイルさがみ 相模大野のこどものまち実行委員会事務局

15:10～15:30 子どもがつくる子どものまち ミニ☆大阪 ミニ☆大阪実行委員会

15:50～16:50

● 「こども会議」 全国から参加したこどもたちによる話し合い

進行役 静岡市 宮城島 清也

16:50～17:00

● 閉会 次回開催地「相模原市」へ横断幕受け渡し

18:00～

● 交流会 【会場】 シーグランド清水ステーションホテル

10/12日（月・祝）

【会場】 静岡市こどもクリエイティブタウン
4階 なんでもホール

● こどもバザール こどものまち特設店舗 開設

10:00-12:00

『こどもがつくるまち「Piccoli せんだい」』

身近なものを使用し簡単に自分の好きなものが出来て「スマイル」になる雑貨を販売

『とさっ子タウン』

とさっ子タウンオリジナルのこどもたち手作り品などを販売

『ミニはままつ』

おはながみの花、ペーパークラフトの花などを販売

全国こどものまちサミット in 静岡 開会 -主催者挨拶・開会宣言-

これより、全国こどものまちサミットin静岡2015を開催いたします。

わたくし、本日の司会を務めさせていただきます静岡市こどもクリエイティブタウン ま・あ・る の館長の井野です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日行われる全国こどものまちサミットですが、全国でこどものまちを主催するメンバーが集結し、全国のこどものまちの特筆すべき事例や抱える課題を出し合い、情報交換や研究を行う場として、年1回開催をしています。

昨年、高知で開催されたサミットにて横断幕を受け取り、今年度はここ静岡市で開催されることとなりました。

今回は講演会、こどものまちの事例紹介、こどものまちの参加者によるこども会議での話し合いに加え、2日目の明日は各地のこどものまちの参加者が、ま・あ・るのこどもバザールに出店してもらうというプログラムも行われます。

普段なかなか聞けない質問や疑問、経験談など貴重な情報を得るチャンスですので、是非、皆さん積極的に参加して頂ければと思います。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、開会に先立ちまして静岡市の山本克也副市長よりご挨拶申し上げます。

皆さん、こんにちは

ご紹介いただきました静岡市の副市長の山本と申します。

本日は、ようこそ静岡市においで下さいました。全国のこどものまちの関係者の皆さんに本当にたくさん参加をしていただきまして、全国こどものまちサミットが開催できますことを本当に嬉しく思っております。

今日の会場になっておりますここ、静岡市こどもクリエイティブタウン ま・あ・る でございますが、

子どもさん達にもものづくりの体験や仕事の体験、そういったことを通して創造性とか主体性を育んでもらって、将来の地域の産業を担っていくような人材に育てていただきたいということで、一昨年の1月にオープンをした施設でございます。

週末などは、子どもが店長さんになったりして、お店を運営するというこどもバザールが、開催されて大変人気があります。昨年、利用者も館長さんのいろんなご努力で、ずいぶん増えてきておりまして、昨年は9万人くらいの方にご利用いただいているということになっております。

こどもバザールは、今日もやっておりますので是非ご覧になっていただきたいと思います。

また、今日は、これから千葉大学の木下先生のご講演をいただきます。

木下先生、もう、皆さんよくご存知のことだと思いますけれども住民参加、特に子どもの参画によるまちづくりを長年ご研究されまして、各地のいろんなプロジェクトにも取り組んでいらっしゃいます。

大変有意義なお話をいただけるものと思っております。

また、いろんな催しを通して全国のこどものまちの活動についての情報交換ですとか、意見交換をやっていただきまして、皆さん方のそれぞれのこどものまちの活動に役立つように、今日は有効に時間を使っただけければと思っております。

大変簡単ではありますが、主催者を代表しての挨拶にさせていただきます。

今日はどうもありがとうございました。



では、続きまして静岡市教育委員会の高木雅宏教育長よりご挨拶申し上げます。

改めまして、皆さんこんにちは。

今、紹介をいただきました静岡市教育委員会の高木でございます。

よろしくお願いいたします。

今日は、全国こどものまちサミットin静岡2015 ということで、開催まことにおめでとうございます。

また、たくさんの皆さんがお集まりいただきました。

本当にありがとうございます。

要項をみますと全国のいろんなところから、30団体の皆さまがお集まりだということで、本当に素晴らしいなあと思っております。

副市長からもお話がありましたけれども、よろこそ静岡市においで下さいました。

ありがとうございました。

実は私、今年も、ま・あ・るに4回か、5回来ています。静岡市の教育委員は私を含めて6名いますけれども、教育委員会も後押しをして、一緒にという想いがありまして、委員みなでおしごと体験をしてみようということで、いろいろなお店に入って体験をしたことがあります。

私はネイルアートを経験しました。

こんなおじさんですけども、ネイルアートをやりました。子どもに教えてもらいながらやったんですけども、とっても楽しいひと時でした。

子どもが主体性を持つ、自分ひとりひとりが役割を持つ、そして、その役割がお互いにかかわり合う、そんな素晴らしい経験はありませんね。

こういうことを通しながら、子ども達が成長して行きます。

今日は、その主人公である子ども達がたくさん来ています。

そして、それを支えてくださる多くのサポーターの皆さんも来て下さっています。

本当に素晴らしい会だと思っています。

ますます子ども達が、子ども達の居場所があって、そして自分に自信を持って将来に向かって大きな夢を持つ、そんな子どもが主体のまちづくりができれば素晴らしいなあ。と思っています。

2日間、大変でしょうけども、是非よろしくお願いいたします。

以上、挨拶いたします。

ありがとうございます。



それでは、続きまして静岡市の関係部署からの出席者をご紹介します。

子ども未来局から平松以津子局長。

「本日は全国こどものまちサミットの盛大なる開催、おめでとうございます。」

経済局から築地伸幸局長。

「今日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。」

同じく経済局から鈴木俊之次長兼商工部長。

「みなさん、こんにちは。

よろこそ静岡市へお越しくださいました。

静岡市を楽しんでいってください。」

それでは、続きまして、わたくしより開会宣言をさせていただきます。

ただいまより、全国こどものまちサミット 2015 in 静岡の開会を宣言いたします。

本日のサミットに参加された皆様によって、
今後のこどものまちが増々活発に、また有意義に
行われ、子ども達が充実した時間が過ごせるよ
うになればと思います。

2日間、どうぞよろしくお願いいたします。



講演者プロフィール

きのした いさみ
木下 勇



千葉大学大学院園芸学研究科・教授。専門 都市計画・農村計画

若い時「三世代遊び場マップ」等の活動を仲間と始め、現在は子ども・住民参画のまちづくり、都市計画、持続可能な都市再開発地域マネジメント、環境マネジメントの関連で活動中。

1978年、東京工業大学建築学科卒業。1979-80年スイス連邦工科大学留学、1984年 東京工業大学大学院博士課程修了、工学博士。農村生活総合センター研究員、千葉大学園芸学部助手、助教授を経て2005年より現職。

東京工業大学非常勤講師、日本学術会議連携会員

ユニセフCFC「子どもにやさしいまち」国際諮問委員会委員

著書：『ワークショップ～住民主体のまちづくりへの方法論』（単著、学芸出版）『遊びと街のエコロジー』（単著、丸善）、『まちワーク』（共編著、風土社）、『子ども・若者の参画』（共著、萌文社）、『都市計画の理論』（共著、学芸出版）、『海辺の環境学』（共著、東大出版会）、『こどもたちが学校をつくる』（翻訳、鹿島出版会）『こどもがまちをつくる』（共編著、萌文社）、『アイデンティティと持続可能性（日英併記）』（共編著、萌文社）など。

「こどものまち」から「子どもにやさしいまち」を創造する

～ 遊び・仕事と産業 ～

どうも、皆さんこんにちは。

ご紹介いただきました木下です。

今日は、こちら ま・あ・る でお話をさせていただくということで、新しく、実はいま、こどものまちは全国でいくつくらいになりましたかね。花輪さんが80くらいになるという話、ドイツもこのあいだ聞いて、80くらいはあるかなと言っていたので、もうドイツに迫る勢いで日本に広がっている。世界で2番目に、こどものまちが盛んに展開されていることになっており、多くは3日間とか数日間、名古屋でも、40日くらいですかね。

夏休みにやったり、でも一番長いのはこの静岡で、年中開いている。

ここで開催できることは、非常に今後のこどものまちを考える上でも大きな機会でもあり、意味のあることだと思います。

そして、実は、始める前に少しメーリングリストで議論がありまして、産業。実は、この ま・あ・る っ
てこどものまちは、産業政策課が進めているということでありまして、他にありますか。そういう
こどものまちを産業関連が関わってくるって。ちょっと近いところで札幌が前に、ちょっと形態が違
いますけど、同じ産業界が関わり合いながら、というのがありましたけれども、表だってですね。こ
ういう駅前再開発ビルに、ま・あ・る みたいに産業政策課が進める。それは他にはないのではないか
という。そこで、産業と子どもとの関連で、本も一緒に書いた みえ けんぞうさんが産業界とは何か、
大きな産業とは一線を画し、わが町の産業のような意味かと問題提起されました。まあ、それで少し
考えたお話をさせていただきます。

まず最初にですね、ちょっと皆さんに…

皆さんは、子どもたちがどのように将来やりたい仕事を見つけるのだろうか。いつごろ、どんなふう
に将来やりたいことを見つけるのだろうか。ちょっと考えてみてもらえたらと。

せっかく子どもたちがいるから、子どもたちにも聞いてみようかな。

子どもたちのだれか、将来こういう仕事をやりたいとはっきりしている人。

いないですか？

あそこで手が挙がっている。

何になりたいですか？

『 エンジニア！ 』

すごい！ エンジニア、頼もしいですね。

エンジニアになりたいという子どもたちの数は減っているから…

ありがとう。

大人の人にも聞いてみましょう。

どんなふうに今の仕事を見つけておられるか？

どなたかいらっしゃいます？

特に子どもの時に見つけて、それになっている方いらっしゃいますか？

教育長。

子どもの時、教育長になるって…

『 私はね、中学の時に担任の先生にあこがれて教師にこそなりたいと。
そういうことです。』

なるほど、担任の先生がすごかったんですね。

今の教育長の話のように、そういう大人の関わりって影響があるんだと思います。

そんなことですね。ちょっと、みえけんぞうさんからふられて、産業と仕事と遊びっていのを考えてみようと思って。

息子や周りをみていると、テレビや学校の世界しか知らずに将来のことを考えるとまわりの空気に流されるかと。そんなふうにまわりの空気で、将来の仕事を選んでしまっているのか、考える時間がないのか。多くの時間も、そういう部活やなんかに取られている。いったい、いつ社会でいろんな仕事があるってことを知るんだろうか。

そんなことを考えている時に、私の教え子の一人がフェイスブックに書いていました。まちづくりの仕事をしている彼の息子さんが通っている小学校でのある授業でそんなまちづくりのことが話題になった時に、先生からお父さんに聞いてきて欲しいことがあると息子さんが頼まれた。それで、そのお父さんは、夜中徹夜しながら踏ん張る。子どもが学校でそのレポートを非常に自信たっぷりに披露した。

息子さんが父親の仕事に誇りをもっている。理解している。

よくいろんな所に、まちづくりの現場に連れて行っていると、後で聞きました。

私は、それにかかなりショックを受けまして、自分自身がそんな風に子育てしていたのか。息子が自分の仕事を理解しているか心もとないし、そんな誇りに思っていないし、家内でさえどうなのか心もとない。自己反省的に仕事というのと、子どもとの関わりを考えましてですね。そこでちょっと思いついたのが、ハンナ・アーレントの『人間の条件』という本。

今、文庫本でかなり廉価のがあるんで、もし関心があったら読んでいただければと思うんですが。

もちろん、ハンナ・アーレントはちょっと癖がある、批判もないこともないんですが、女性の研究者から支持されている。

彼女の哲学の非常に強みというのは、ギリシャ時代の著作に書いてあるものに詳しいんです。というのは、彼女のお父さんが、そういうラテン語やギリシャ時代のものに、ギリシャ哲学に詳しい。少女時代からそういうのを読んでいた。それが彼女の哲学の原点なんです。ですから、根源的なギリシャの時代のことがよく出てきている。わたしもそんなに知らないんですけども、ギリシャ時代には、活動（Action）が上であって、次、仕事があって、労働。

活動っていうのは、自由な表現で、遊びもそうですね。自分の主体的にしたいものをしていようにする。子ども達の遊びもそう。子ども達がなんかやって、家の仕事をなんか手伝うってときに仕事っていうのが出てきます。今日のま・あ・るのパンフレットにも仕事。仕事がいっぱいですね。

仕事ってなんだろう。そして、ギリシャ時代には、その後に労働って、あの頃は奴隷制もあって戦争で勝ったら、負けた方は奴隷になって、家事のいろんなことを。それ労働で、そういう位置付けだった。それが近代以前まで職人のギルドとか、ヨーロッパの職人組合。職人芸がほとんど、それが仕事として、仕事という言葉には、やっていること、ま・あ・る で働いていることも仕事だけれども、作っているもの、これ、わたしの仕事、作品も仕事って意味しますよね。

そういうふうに職人芸なんですね。でも労働には、労働は労働っていうことだけれども、作ったものを労働っていうものはないです。それが違いです。近代前まで仕事が上位にくるようになって、しかし現在は労働が一番。産業経済の仕組みの中で、工場でベルトコンベアで生産する、そんな批判もあります。機械の中に、機械に使われるような。というような、いろんな近代以降の労働形態。だんだん、労働は大企業に支配におかれる。物が大量生産になってくる。作った物っていうのが、職人芸っていうものより安く、どれだけ便利、どれだけ売れるか。それは生産と消費、消費社会という、もうその仕事が見えなくなって、つくられた物を消費するだけの世界になって、というようなことを批判したんです。

で、一番下に活動というものが。

でも、ま・あ・るで今やっているものは、そういうのをもう一度見直して、活動から仕事への展開へことものまちも進む。もう一度仕事というものを、子どものあそびから体験し、昔、人間が辿った活動から仕事のつながりを子どもたちが体験する。今の社会に対しての産業との関わりっていうのを大人も一緒に考えていく。それがこどものまちの意味じゃないかなということを考えたわけです。

ハンナ・アーレントは労働をそういうように批判的に見えています。

それに対する批判もあります。労働はそれだけ自分らを豊かにしていると。労働して、きちんと1日8時間働いて、給料貰って、それで余暇。ヨーロッパはそういう余暇を大事にするから。

労働と余暇。その分類してきた労働と余暇、分類してきたことも批判しているんです。

それに対しての批判もあるんだけど、日本はどうかというと、労働時間があって、残業もあって、お父さんなんか夜遅く、またしかも、また帰りに一杯飲んで帰って、12時過ぎて、私もそんなように、子どももそんな環境で、あんまり顔を合わせることなく過ごしていた時もあるんですけど、日本社会はそういうのが当然のように。最近の若い世代のお父さんは違ってきているみたいですけど。

そういうようにして、日本は高度成長を遂げて豊かな便利な時代になってきた。そこでちょっと豊かな時代の育った子ども達に、これは学生に、中高生時代の過ごしたまちの姿を地図に書いてもらった、これ見てください。これ、なんの記号かわかります？（M）マックね。そうすると、このしってなんだろう。ローソン。まさに、そのローソン。それから、FMはファミリーマートですね。それから、丸KはサークルK。MDはミスタードーナツ。ほとんど、こういうコンビニとファーストフードなんです。

学生を農村部に連れて行ったときに、学生が不安げになって、「先生。この村にはコンビニがありません。」コンビニが無いと不安になる。これが今の若者の生活となっている。

このまちはどこかということ…実はこれ、静岡なんです…。実は寺山修二がもう1975年に、将来こういうふうになるってことを予言していたんです。情報、消費社会、私たちの生活はこんなふうになる。

この写真の広告のように You are what you buy. あなたは、買う 物そのものですと。

透明な存在になって、ものが自分を表す、買っているもの、ブランドもの、私はグッチの鞆を持っています。私はベンツに乗っている、というのが自分を表すかのように。これが消費社会の傾向ですね。

みんな均一に、そういうものに、記号になってる。記号の海の中に、自分自身が透明な存在になっている。まさにクレジット会社の広告が…そんなことがありました。哲学の世界でもそういう記号の海の中に記号、バーチャル、どんどんコピーのコピー。ボードリヤールってひとが、そのような消費社会の行方を書いたんですが、それに刺激されて作られた映画が、このマトリックス。みんなコピーのコピー。エージェント・スミスがそれを表しています。

見たことある人います？ 結構いますよね。

そんなようにですね。これは、実は難しい話ですみませんが、1840年に、もうトクヴィルっていうフランス出身の人が、アメリカ社会の中で自由、平等、活気があるってことが、将来どうなるって一抹の不安を述べている。誰もが自分の世界に対して、みんな平等、平等…競争、競争。競争で誰にでもチャンスがある。ロッキーの映画のように、誰にもチャンスがある。

競争に打ち勝って作り上げる。これがアメリカの資本主義。競争原理。日本でも、そういう経済の原理、競争原理。それに一抹の不安を感じて、誰もが自分、別に友人とか家族とかのみが大切に。その他は目に入らない。背後に大きな力が支配している。それが、こんなような記号によるものなのか。そういう不安を。アメリカはそういうふうに金儲け、豊かになるのに一生懸命。仕事やなんかに対しても。だけど、フランスは違う。仕事をしたら何が一番の喜びかといったら、自分のやった仕事で、他の人が喜んでくれる。なんか作ってみて褒められる、これはすごいものを作ったね。それが最大の喜びだ。その違いを書いたんですね。

世界中がいま、産業経済はこういう競争の中に入った。

さてそこで、この3世代遊び場マップを何度も見せているので、ちょっと飛ばしていきますが、世田谷の三軒茶屋というところで、三世代各時代にですね、遊んでいる場所を示した3枚の地図です。これは1930年代ですが、おじいさん、おばあさんの子どもの頃、この地域で育った人たち。町内会の人たちが多いですが、そういう人たちを中心に、そこで育った人、20人ずつに話を聞いてみました。

どこで遊んだか、遊んだ場所を色で塗って、遊んだエピソードをイラスト入りで書いたんです。

これが、昭和の初めだったのが、昭和30年、1960年代、オリンピックがある年。

これが、調査した1982年。この時、自然がなくなり、ほとんどが道路になっている。つい数年前に、この時に話を聞いた子どもが、もうお母さんになっている。子ども2人いる。それでまた、その子達にやろうと4世代目を作りました。ですから、ぱっと、どの時代が豊かだったか。意図的に書いているわけではないですけども、昭和の初めの方が、子どもの遊びが豊かだった。

結構、外でいろんな出会い、いろんなエピソードがあった。

この時代、今になってくると、ほとんどまちの外で遊んでいない。道での遊びがない。

このグラフの茶色が道です。道の遊びがガタッと減ってきているのがわかる。ほとんど今は家の中、そして学校が中心なんです。遊びの室内化が進む。ただ、私が調査した3世代の1982年頃は、まだ外で子どもたちが遊んでいました。

子どものほうがよく知っているんです。子どもに教わることも多かった。これ、商店街の小さい路地のところなんです。ここにウサギがいて、おじさんが出てきて芸を見せる、ウサギの芸を見せる。まさに、それを聞いて行ったときに撮ったんですが、その前におじさん出てきて、ウサギに飛び乗り、輪くぐり、ジャンプ、それから、棒数え、棒を数える芸を教えてください。こういうのも、子どもたちの方がよく知っている。

これも子どもから教わったんですけど、このおじさんは、昼の2時頃になると屋根の上で昼寝をしていた。こんなの下から見えないですよ。こんなはどうやって…。子どもの方が、まちと関わっていた。こんなふうにまちのいたるところで遊んでいたんです。

そういうように、通りは大事なんです。それが車に奪われ、交通事故も絶えない、だから、学術会議で提言をしたんです。こういうふうにもっと遊べる道を住宅地内に。幹線道路は、それは車のですけど。住宅地内の車の通りが、多いとか多くないとかじゃなく遊べる道路。というように、こういう道路は時速15km以下ですから、交通事故で死亡事故が増えるのは時速30km以上ですから、こんなのは明らか、だから30km以下、できるなら住宅地内の遊べる道路は15km以下、まったく通行止めにするんじゃないくて、車が子どもの遊びに配慮してゆっくり走る、そういう道路を作ろう、というような提言をしたんですけども、学術会議は内閣府に属して国への提言はウェブで公開されている。

ほとんどあんまり反応がないんですけども、あんまり見られていないということなんですけれども、事務局が「先生、反応がありました。」って最初喜んだら、実はこういうお叱りの…とんでもないことを提案する。道路遊びと井戸端会議の騒音で苦痛を強いられる。

3、4年経ったんですけど、今年にですね、またもう1件。道路遊びは危険だし迷惑。常識を覆す提言。取り下げて欲しいと。道路族に迷惑を被っていると。道路族って、昔は道路を造る議員のことを言っていたんですけども、道路で遊んでいる子どもとか、一緒に遊んでいる親まで。まあそういうのが社会現象なんですね。

実は昨日、ユニセフのこどもにやさしいまちのヨーロッパのネットワークの代表のJan Van Gilsさんが、全国地方自治とこども施策全国自治体シンポジウムで基調講演しました。彼が示したのは、こんなのです。子どもにやさしいまち、道路で、イベントで、こんなふうに食事したりバーベキューしたり。そういうようなのが、ひとつの子どもにやさしいまちのメニューになっているんです。

また、こういう提案を子ども達自身が提案して、子ども達が、こういうデモをしたりしている。最近国は、18歳に選挙年齢を下げて、学校教育にも、それをどのように子ども達に社会に対する関心を持っていくか。しかし、そこで今の行政批判をしてはいけないというような、そんなのまで、お達しが出てくるようなですね、もっと自由に発言して、自由に議論しながら考えていくってことをしていかないと、考える力が育たないんじゃないか。まあ、こういうのがヨーロッパでは、普通にやっている。ある自治体で、私はこういう子どものロビー活動っていうのを、子どもの参画のガイドラインに入れたら、しっかりとその部分は削除されていまして、日本ではまだまだこういうことを許す風潮ではないのかなと思います。

こういう道路作りは、オランダから始まりドイツやいろいろ北欧に広がっているんですけど、オランダではボンネルフと定められた区域では、子どもが遊ぶことができるようになっているんです。きちんと、さっきのような道路で、こういうマークが付いたところは、子どもが遊ぶことができる。法律改正をしました。日本でも似たようなコミュニティ道路、くらしの道ゾーン、静岡でも作られていますが、そこは法律改正まではいかなかった。

道路交通法の禁止事項に、これ見てください。何人も次のことをしてはいけない。

道路において酒に酔って、交通の妨害となるような程度にふらつくこと。こういうのが禁止事項だって知っていました？

教育長さん、ないですかね。酔っぱらって歩いて…

『いいえ、大丈夫です。』

子どもが寝そべったりする、ままごとやなんか、禁止事項なんです。取り締まろうと思えば取り締まれる。オランダ、ドイツもこういう法律を改正して遊べる道路を造った。

これは、スイスのちょうど80年ごろ、私、この取材をしてた時のことです。お母さんたちがそういう道路を造りたいと発起しました。自分たちで資金を半分出さなきゃいけないってそういう制度で、お母さんたちはバザーやりながら集めて手作りです。これね、卓球台置いたりですね、ベンチで子どもたちと作り、遊びの箱を作り、こんな参加のプロセスでこどもの意見を入れながら造る。

30年後にまた行きましたら、まだ、子どもたちが多いんですね。子どもの感性に響く、相変わらず卓球台もあってですね、30年も卓球台はもつのでしょうか？ 保つんですね。相変わらず遊びの箱もある。ちょっと膨れ上がって、こんな樹にブランコ吊るしたり、より遊びの環境が良くなった。

ただ、私、ここに4.5回通って写真撮っていたら、最後に車から降りたイタリアのマフィアの親分と子分みたいな2人に呼び止められて、おまえ、この間から、このあたりをうろついているだろう。って質問されて、で、かくかくしかじか 30年前…で、日本から来たといったら、ちょっと来いと連れて行かれたのが半地下で、皮がぶら下がっていて一瞬、身の危険性を感じたんですけど、見ろっていわれたら、テレビ、当時のワールドカップのサッカーの日本対カメルーン戦で1-0で日本がリードしていて、それを見ろって。それで、エスプレッソからギリッシーニが出てきて、最後に日本が勝ったらワインで乾杯してくれました。それで話を聞くことができました。ここは子育てし易いって、みんながこぞってここに住みたがる。だから、ここで子育てが終わったら、さらに買った人は売って、だから不動産の価値も上がってですね、子育てし易いまち。ずうっとそういうようなまち。こんな道路造りから、そんなお母さんたちの道路造りから始まった。

そんなようなことはイギリスでも展開しています。芝をはった道路。これ、ストリートパーティ。車中心のイギリスの道路もこんなように2日間だけ、みんな出てきて、馬まででてきたり、大人、子ども一緒に遊んで、これがテレビで話題になり、これを真似した動きが一杯出てきて、それで、子ども達は連邦の議会に陳情に行って、そして出来たのがホームゾーンです。国が…イギリス政府が10か所こういう道路を整備。この地区に、こうやって、さっきのオランダに遅れること2-30年ですけど、ようやく、そんな道路造りもイギリスで行われた。

ただ、日本になくはなくてですね。大田区、東京都。実は、美濃部都政時代に、こどもの数が増えて、公園整備が間に合わないから暫定的に校庭解放や空き地の遊び場解放、そして道路の遊び場解放ですね。大田区は熱心にやった地区です。

密集している町工場のある地区でも、そのとき私が見たのは、そんな異年齢の子どもらが、ちょっと障害のある子も一緒に遊んでる。非常にびっくりしました。いろんな会報が地域ごとに出ていて、この横断幕の管理、若干のお金が出るんで、貯まったら沿道単位で餅つきだ、大らく書き大会だ、スイカ割りやいろんな催しをやっていた。正にストリートパーティ。そういうことも日本でやっていたい、やろうと思えばできることじゃないかな。こういう沿道で、子ども達が遊び育ち易い。こういう関係ができれば、子どもを預けたり、虐待防止や、防犯、防災、そしてお年寄りの孤独死防止にもなる。

そのように道路こそが、子どもが社会化する場であるっていったのはジェインジ・ジェイコブズさん。アメリカの都市計画の歴史にはなくてはならない存在になっている人です。主婦からそしてジャーナリストになって、都市計画の大御所に噛みついて、自分自身の生活に根差したまちづくり、あり方を問うた方です。そして、20世紀の建築家の巨匠のルイス・カーンはこんなことを言っています。

「都市とは、その通りを歩いているひとりの少年が、いつの日か、なりたいと思うものを感じ取れる場所ではなくてはならない。」まちってというのはそんな場なんです。いろんな大人に出会える。彼自身がやはり貧しい地区で育ち、遊びながら落書きなんかしてたんです。それをみんなに褒められて、だんだんそれに自信を得て絵を描き、最後に地域の人が、教会かどこかで絵の展示会を開いてくれた。それが、彼がそういう建築家になっていく経緯となった。そういうのを振り返っていつているんですが、車が、道路が多すぎる。だから、道路で遊ばせたらどうかっていうのまで提案しています。

さて、時間が無くなりましたんで、ちょっと、こどものまちのミニ・ミュンヘンの最初の…。ですから、ヨーロッパも同じで都市自体がもう、子ども達がストリートで遊んだりなんかが出来なくなっている、そういう流れ。社会と接点がないから、かわりにこういうこどものまちでいろんな仕事に、子ども達が接してられるようにしようと。元々はこういう遊びから始まったことです。お店屋さんごっこのように。また、向こうはサーカスがやってくる。特に外からやってくることに、こどもたちは関心を持ちますね。僕もこどもの頃にチンドン屋さんが来ると、チンドン屋さんの後をくっついていく。旅芸人、旅芸人ってのは、わかんないだろうね、子ども達ね。芝居の一座…。

ミュンヘンのこういうプレーバスって活動を始めた人たちは、10台くらいバスやトラックを持って、屋外に倉庫があって、テーマに応じて積み込んで、さっきのまち遊び、サーカス遊び、いろんな遊びを…博物館とくっついて中世の恰好をして、それで博物館を巡る。そんな活動をしていました。そのまち遊びを大きく、79年の国際児童年のときにやったのはミニ・ミュンヘン。第一回、その時はこんな感じですよ。こんな石屋さん。煉瓦、石を積み上げるんですね。結構、そのときにもいろんな木工づくりのこういうプロのひとにも手伝ってもらいながらやりました。これは、テレビ局も子どもらがやりました。そして市長さん、議員さんが訪ねてきて、子ども議員、子ども市長と対談をテレビで流す。そんなのをやっている。このミニ・ミュンヘンをやってきたひとたちは、ペタゴギッシュアクション 教育的活動って、遊びこそ教育である。学びであることを徹底して元教師、若い教師や教育系の学生だったひとたちが始めた。その彼らが、いくつかに分岐して、そのひとつがミニ・ミュンヘン専門に。ミニ・ミュンヘンだけじゃないですけども、やっているゲルト・グリュナイズルさんたちのグループです。

その元のところは、ヴォルフガングさんといったペタゴギッシュアクションの創始者でもあり、こういうフライツァイト・ペタゴグ 余暇教育者 シュピュール・ペタゴグ 遊びの教育者っていう専門の領域を作った人。プレーリーダー、プレーワーカーという職をドイツの中で根付かせた人です。昨年のミニ・ミュンヘンですが、いつもはオリンピックパークでやっていたんですけども、オリンピックパークの改修工事で、昨年はデニスハーレー、製鉄所だった工場のところが今、文化センターになっていて、そこでやりました。初期も大きな倉庫でやったんですが、そういうふうな雰囲気、またこう出る、面白い。立派なホールの建物ではなくて、こんな工場の建物を使って。この中に作る道具類は、さっきのように倉庫にあって、それを積み込んで、いつものようにミニ・ミュンヘンの通りが出来たり、それから、これは市役所の中の都市計画課ですね。建物、お金が貯まって外に家を造るときに建築確認を取らなきゃならない。そこで、子どもらが図面を作ったり、建築確認の作業をやったり。今年はこのように、まちの建物やなんかをこの時代にして、どれがいいと。こういう景観を子どもらが議論している。

こんなのまで、大人の専門家が関わり合いながらやっている。真似とごっこ遊びから始めた。遊びから真似、真似るが学びになっている。そういう流れを感じることができました。

レストラン、素晴らしいレストラン。その中で、やっぱりコックの人たちが3~4人手伝いながら、子ども達が、こういうパイを作り、なんかして。常にそういう専門家が関わりながら、そこでいろんな仕事を子どもらが接している。それが、こどものまちのひとつの大きな魅力かな。こういう建設作業の大人の人がいって子どもがいる。これもこういう仕組みを考えてやる。

これはサイエンス・ラボですね。今年は工場の円筒状の建物で、こういう巨大な実験をやっていました。さきほどのエンジニアになりたい。ほんとうに、こういうような遊びの中で実験をやる。実験も遊びも同じように好奇心や謎の探究心から始まる。それから、前々回くらいからになるかな。こういう、株っていうか、証券会社のファイナンスのコンサルタント。子どもらの貯まったお金を投資に使って、株の変動で儲ける。そんなのをやってですね、はたしてこういうのがいいのかどうか。さっきの仕事の概念からすると、現在の枠に、はまっているんじゃないかと思うんだけど。まあ、ゲームとして今の社会を知るにはいいかと。

そういうのをやっているミュンヘンは、こういうロビー活動、子ども達のためのロビー活動をやって政治を変えていきました。行政も。民間のNPO、NGO、そういう行政と民間の団体が協働しながらこういう行政施策を行っています。これ、青少年部局、子ども未来局だとします、で何々課、その系の事業を行政のみがやっているのが黄色です。民間に委託しているのが赤で、共同でやっているのが橙です。そのように結構、民間のセクターに任せている。協働でやっている。

これはドイツの補完性の原理と言います。ミニ・ミュンヘンをやっていた、後の少年局長になったハンスマイヤーホファーさんが、2006年に市川に来た時に言っていました、補完性の原理。小さいものができることを大きいものが邪魔してはいけない、できないことを補完する。

それが、こういう協働が成り立つ原理になる。ミニ・ミュンヘンなどを得意として、そういうのをやっている団体がいたら、それを行政ではできないから、それはだけど公的には素晴らしい活動だから、それを補助する。できないことを補完する。そういうようなこと。

日本ですと民間やNPOがやったら、それを行政が取り上げちゃって、どこでも真似している。

そういうところがちょっと違いますよね。

そういうように補完性の原理で成り立っている。

子どもにやさしいまちのコンテストもやりまして、子どもにやさしいレストラン、子どもにやさしい公園、住環境など。子どもにやさしいミュンヘン市民というのもあります。我こそは子どもにやさしいって大人の人が書類で応募するんです。

子ども審査員がこの書類を見て絞り込んで、インタビューをして選ばれた人がこういうグラビアに出る。こんなのまでやってるんです。



ミニ・いちかわの子どもらの今年の…

(ビデオ映像)

「ミニ・いちかわ 2015より」

- 工務店とのコラボ
- お店を開くということ

というように、こどものまちとしごと…「まち・ひと・しごと」というと地方創生会議…。どこかで、こどものまちを地方創生本部に提案してやったらいいんじゃないかと思うんですけど…。ここで、クエスションが3つありますけれども、
「それは子どもにどんな意味が？」
「それは地域の産業にどんな意味が？」
「それは子どもにやさしいまちにどうつながる？」
これは、みえけんそうさんから指摘された課題で、森岡さんに答えていただきましょう。昨年高知で、土佐で、いろんな産業、地元の業界と連携してやったので。
ちょっと森岡さんいいですか？

『高知県からまいりました、とさっ子タウンの森岡でございます。』

高知の場合はですね。とさっ子タウンを、もう今年で7年目なんですけれど。仕事っていう部分では、非常に地域の方々のご協力をいただいております、40種類くらいの仕事がありました。その中で、子どもにどんな意味があるかということについては、もちろん、遊びという場を通じて自分のやりたいことを見つけるかっていうのもあるんですけども、どちらかというが高知の場合は、非常に辺境の地というか、地域から人が出ていくという状況がございますので、そういった意味では地域に、どんな仕事があるのかっていうことを知ってもらうきっかけになるのではないだろうか。ということでやっている部分もございますし、だからといって、企業が子どもたちを取り込もうというわけではなく、ひとつの選択肢の中で、そういったところもあるのではないかと考えております。

各企業は、こどものまちに入っても企業名を冠しておりません。まったく別の名前を付けております。ちょっと遊び心を設けてやっております。例えば、地元の量販店のサニーマート 毎日屋さんというお店がありますが、そこは、2日間しか、こどものまちがないので「今日だけ屋」という名前にしまして、レシートにも「今日だけ屋 とさっ子タウン支店」といったかたちで、遊び心を入れていただいております。ある意味大人も楽しんでいるところがございますね。それが、子どもたちもうすうす感じると思うんですが、遊びというところの切り口に合致をしているのではないかと考えております。』

企業名を伏せているのは、なにか理由があるんですか？

『企業名を伏せているのは、実行委員会でシステムウォッチングをやっておりまして、実行委員会の中で、かなり物議を醸したことです。ご協力をいただくには、営業とかをやっているグループでは、企業さんの名前を出した方がもっと協力をしてもらえないだろうかという話もありましたが、こどものまちというのは、あくまでも仮想のまちであって現実の社会ではないと。遊びという部分を失いたくないということで、企業の名前は出さないというかたちに徹底しております。そのかわり、大人の保護者の方が入ってこられるガイダンスの部分ですとか、保護者の待合いのところは企業名を出しまして、どういところが協力していただいているかということは、PRをしていくということで完全に切り分けをしております。ただ、中にはお菓子とかの包装には、企業名が入っているものがありますので、こういうのはどうするのか、というところまで、中で喧々諤々やりましたけれども、最終的には、そういったものは品質保全という部分の中で、どうしても必要なものだから、それは仕方がないだろうと。だけど、なるべく企業名を前に出していくのは、やめようというかたちにしております。』

ありがとうございます。

そのあたりは、議論になるところだと思います。

キッザニアは業種、業界で1企業に絞って…航空会社だったら全日空。そういう企業が関わる時、企業のPRを含めて広告に使っているところもありましたね。

それに対してみえけんぞうさんは、ちょっと異議を申し立てたんだと思うんですけど、どうですか？

『産業界って言葉を、先生が最初に定義されたときに、どういう方向に議論するのか、ちょっとわからなかったこともあって、ちょっと強い言葉になったかもしれないんですけども、改めて考えてみれば、静岡の事が好きだから、産業部局の皆さんもこの説を良しとされて、産業界あげて支援をして下さるっていうひとつの仕掛け。それが、これまでずっとお話されてきた文脈に沿った流れを作っていくための仕掛けとして大きく左右するってことはあり得ると思うんですよ。ですから、あの時の議論の事をいま言い訳めいて言うってしまうということもあるかもしれないんですけども、みんなが繋がっていったってひとつのものに意識を向けていく。その意識の向け方に、ま・あ・る流とか、あるいは静岡流とかっていうものが、こういうものを介して見えてくるとすれば、非常に面白いなってことは率直に思います。もうひとつは、私というよりもどちらかというよりは桃子の方が見つけてきたものとして、ミュンヘンの子どもたちがミニ・ミュンヘンの中の遊びを通じて、このまちで生きていくということに、なにかが繋がっているっていう予感を感じてきたと、たびたび聞いてきたこともあって、そこが、仕事っていうことが、もう少し生活者目線の意味での仕事って、最初の頃から言ってくださっていた。その部分に大きく根ざしているし、もうひとつは千葉市の若い建築家の男の子が、こどものまちに非常に興味を持って、地元に住んでいるお父さんたちの仕事を見せることから始めるというプログラムを作ったんですよ。僕ら、あんまり接触がなかった若い男の子だったんですけど、自分なりに考えて、それってとっても繋がったなって。そこも思いがあったもんですから…以上。』

非常にいい議論になったと思うんですが、森岡さんは高知は仮想のまちだと言っていたんですが、実際に子どもたちが駅弁を開発して売ったりしていますよね。

現実には、コミュニティ、地域の、それから商品開発に、そこまで子どもらが現実社会に関わるっていうきっかけに、こどものまちはなるんじゃないかなと。

また、地元の、企業の名前を出す出さないは…、ま・あ・るは出していますけど。それは、いろんな考え方があるんですけども、私が今回お伝えしたかったのは、昔は遊びからいろんな仕事に接する場面、自分が、そこのいろんな大人の人を真似て、真似て、そこで自分の興味、将来なるもの、ならなくても糧になる技術を身に付けていた時代から、まったく室内化して家の中、学校だけ。そこに、自分はなにに向いているの、なにが出来るのかという自信もなくなり、消費社会の記号に左右されたイメージでふわっとなにかを、将来を考えなきゃいけない。受験だけに追われて、大学入って大学を出ても、なにになりたいのかもはっきりしない。そのような育て方を日本社会全体がしてきたんじゃないのかと。そして、一方に後継者不足という産業界の悩みがあります。そこに、先ほどのエンジニアとか熟練工。建設でもそういう職人芸的なものの後継者。農業、水産業もそういう技術、「仕事」の継承が課題となっています。そこで子どもたちがなにかそういう「仕事」に接して興味を持つ。こどものまちがそういう仕掛けになるんじゃないかと。

ですから、ま・あ・るを産業政策課がやっている意味が、正にそこにあるんじゃないかと思っています。

以上で、私の話を終わります。

全国こどものまちサミット in 静岡 ま・あ・る こどもバザールの紹介

ま・あ・る 館長代理 小澤 京子

こんにちは。

こどもバザールの担当をしている小澤京子といます。

これから、ま・あ・る のこどものまち、こどもバザール
について紹介させていただきます。

その前に、ま・あ・る はこどもバザール以外にもたくさんの
活動をしているので代表的な活動を5つ紹介させていただきます。

まず1つ目は、平日に未就学児さん親子向けの講座やワーク
ショップを開催しています。

ベビーマッサージや英語、クッキングや音楽遊び、そして
運動遊びなど幅広く展開しています。

2つ目は、平日にキャリア教育の授業のひとつとして学校が
ま・あ・る を利用しています。

学校の先生が、どんなことをしたいのか希望を聞いて、先生の希望に答えられるプログラムをま・あ・る
がコーディネーターとして提案します。商店街や近くの施設で職業体験だったり、ま・あ・る に講師を招
いてのお仕事体験だったり、それぞれの学校によってプログラムを変えています。

3つ目はクラブ、プロジェクトという活動です。

こちらは、同じことに興味を持つメンバーが定期的に集まって一つの物を完成させる活動です。これま
でにイベントに向けたお化け屋敷。今、こちらの写真がお化け屋敷です。

だったり、商店街を舞台にした映画を作ったりしています。

4つ目は、しごとやものづくりをテーマにした講座。土日祝日、長期休暇の平日に開催しています。パ
ソコンでのRPGや作曲づくり、日本文化に触れる和太鼓体験、職人さんから教わる椅子づくり、料理
長に飲茶づくりを教わるなどみんなが挑戦してみたいこと、みんなに体験してもらいたいものを年間
250講座以上を開催しています。

最後5つめが、こどもバザールです。こちらは小学生以上の皆さんができるおしごと体験となります。
どの活動でも商店街さんや近くの近隣施設、企業、団体、大学さんなどにご協力いただいております。
では、ここから、いよいよバザールについてお話します。

常設のこどものまち、こどもバザールを行って2年9ヶ月が経ちました。

運営を通して感じることはイベントとしてのこどものまちと常設のこどものまち、こちら両方とも役割
が違うのではないかとことです。

イベントのこどものまちな良さは、本番に向けて子どもたちが一丸となって準備の段階から本番を目指
して頑張って、達成感を得られる本番を迎えられるということです。

そして、イベントのこどものまちではできるお店の幅が広いということです。

例えば、食べ物屋さん。

常設のこどもバザールでは、食品衛生法という法律の決まりで、食べ物のお店が簡単には開けません。
そのため、常設のバザールでは1日限定のイベントとして、食べ物屋さんをオープンしています。

これを一つ取っても、イベントのこどものまちでは、自分たちのやりたいお店に挑戦できるという点が
とても魅力的です。

では、時間を巻き戻して、ま・あ・る が出来る前のお話をさせていただきます。

みんなで、ま・あ・る を作ろうというプランが出た時、みんながやっているような大人の手を借りない、
子ども達だけで作りあげていくミニ静岡ということどものまちなイベントを行いました。

今日、ま・あ・る の代表で来てくれている向山素生君は、ミニ静岡を2回経験して、2回目の時に市長に
選ばれています。その経験の後、ま・あ・る の開館準備リーダーズに参加しました。

準備リーダーズは、開館する前の ま・あ・る、この建物の中ですね。を拠点に自分が作りたいお店の担
当になったメンバーと自分の担当のお店の準備を、自分たちがお客様をお迎えするんだという目標をも
とに取り組みました。



オープンを迎える頃には、一緒に活動してきた仲間とともに、ま・あ・るは自分たちが作り上げた建物だ、自分たちの場所だ、という強い連帯意識が芽生えていました。

このように、自分たちがまちをつくるという一つの目標に向かって、みんなで知恵を出し合い、協力して作り上げていくという活動が存分に味わえるのは、イベントの醍醐味であり、常設ではできない素晴らしい点だと思います。

では、常設はどうでしょうか。

結論から言うと、常設のこどもバザールではすべてのお店をゼロから作り上げること、それを全員の子どもたちが一緒になって進めることはできません。

こどもバザールでは毎週、土日祝日、そして夏休みなどの長期休暇の平日は、毎日遊びに来る小学生、つまりこども店長のお店で働く社員さんの受入をしています。

では、ここで実際のこども店長の活動をご覧いただきたいと思います。

(ビデオ上映)

- ・こどもバザールでのこども店長の活動のようす
- ・ハローワーク店長 社員さんをようどう
- ・プラバンや店長 接客のようす
- ・こどもバザールおわりの会 その日のふりかえり・お店ごと一言
- ・こども店長になるには… 研修→会議→ミーティング 過程をふみます
- ・新規こども店長見習い研修 店長になるために、店長になる前に、研修をうけます
- ・【店長の応募資格】社員経験のある小学4年生以上
【見習い研修ですること】
 - ① ま・あ・るルールのおさらい
 - ② おしごとノートの書き方練習
 - ③ 店長見習い体験
- ・レジの使い方研修 2年かけて、念願の“レジ”導入！
レジを入れるまでに、売上チェックをがんばりました。
- ・子ども会議 新しいお店の提案
今のお店メンバーと案をだしあってます
めんせつやつくりたい！という話
- ・こどもミーティング 新しい期間がはじまるとき
- ・同じ担当のお店のメンバーと交流ワークショップ ～パスタでタワーをつくる～
- ・元店長の中学生の先輩が現役店長の事業計画にアドバイス
- ・臨時子ども会議 子ども店長提案「税金制度について」考える
こどもバザールの商品に税金をつける？
目的：お金を流通させるため（貯金額の多い人と少ない人の差がある）
方法：未就学児（ちびっこ）の値段に対して、小学生は1割多い値段にする。
- ・【おまけ】
“月に2回以上出勤する”を守ると店長バッチをGET！
レジバッチもあるよ

このように、こども店長の活動を続けることで、今の映像のように、ちょっとずつ、みんな成長しながらいろいろなことができるようになってきています。

ここから、私の話だけになりますので

今の映像を思い浮かべながら聞いていただけるとうれしいです。

ま・あ・る がオープンした後、準備リーダーズのみんながどうなったかという

実は、準備リーダーズの本番は開館の2日間だけでした。

そうはいつでも、ま・あ・る の運営はまだ始まったばかりで、そのため役目を終えた準備リーダーズの何人かが残って、こども店長としてこどもバザールの運営を始めましたが、たくさんの社員さん、つまり、おしごと体験に来るお客さんの対応が、なかなかできませんでした。

例えば、社員の受け入れ人数。ちょっと思い浮かべてみてください。

自分ひとりで受け入れの出来る社員さんって何人くらいですかね

ちょっとそれを考えたところ、まあ1人か2人か、お客さんも対応しなきゃいけないってなったときに精一杯かなという状態です。

当時、14店舗ほど、リーダーズが作ったお店がありました。全体で考えても14店舗×2人の社員さん、すると28人、一時は200人以上の子ども達がハローワークに並ぶことがありましたので、28人の就職先しかないんですよ。28人、お仕事に行ってしまうと残りの170人は、ずーっと待ってなきゃいけない。その繰り返しになります。

もし私が社員さんだとしたら、たぶん待ちくたびれてしまって、お仕事するの嫌だってなってしまうかなと思います。

その上、イベントと違って毎週末、それからずーっと続くわけです。

そうすると、だんだん社員の仕事や役割を作り続けることができなくて、社員の受入ができずに閉店するお店がすぐに出てきてしまいました。

そこで、こども店長が担当するお店とは別に、初めて来た方が挑戦しやすい、しかもたくさんの人数を受け入れることができる大人スタッフが担当するお仕事をスタートしました。

これは、こども店長に過度な負担をかけないため、そして社員の受入の回数を増やすためです。

ひとつは工場のように、こどもバザールの商品を作るお仕事。もう一つはパソコンを使ってテーマに沿ってデザインするお仕事。それぞれ8人から最大20人まで受け入れをすることができます。

次にこども店長のシステムを作りました。

リーダーズ解散後の開館当初、こども店長は当日の朝、来た人から順番にやりたいお店を決めました。

自分の担当のお店が決まっていたわけではないので、店長が入れ替わりするとお店のシステムが不安定で社員の受入も不安定なままでした。

さらには、店長の中で人気のお店とそうではないお店が出てきてしまって、倒産や閉店に追い込まれるところが出てきました。

そこで、3ヶ月ごとに担当を決めて、そのタイミングに合わせて新しく入りたい店長さん、もう店長さん終わりにしたい子の入替をするようにしました。

イベントのような大きな目標ではありませんが、小さな期間が設けられて、その期間取り組む意欲が増すようになりました。

さらに、このシステムが進むにつれて、こども店長に出勤のルールが決まりました。

月に2回以上働くことを条件にして、そのノルマをクリアできると、その時の店長さんやってきましたよ、という証明になる店長バッチを渡します。

さっきの映像で最後に出てきたものになります。

これも小さな目標になりました。

このルールが定着して常に100名程度のこども店長の登録があります。

では、常設でのまちづくりの話に戻します。

3ヶ月ごとの期間の終わりにこども会議を行います。

そこで閉店するお店や新しいお店、その案について、子ども同士で意見を出してもらいます。

こどもバザールのすべてのお店が全部いっぺんに新しくなるということはありませんでしたが、これまでにオープンして閉店したお店は13店舗になります。

今が11期のこども店長の活動なので、1期ごとにだいたい1~2店舗閉店したり開店したりしている状態です。

新しいお店を開店したい場合は、子ども会議の前に企画書を書いて提案の準備をします。

会議で発表をして、みんなから賛成の同意を得られれば、可決されて実際にお店を開くことができます。せっかく新しいお店を開いても、運営の状態で社員さんの仕事を作れなかったり、商品の人気がなかったり、店長の出勤率が悪くて開店する日数が少なかったりすると、こども同士でまた話し合って閉店に追い込まれます。

オープンの時から続いているお店も、もちろんあります。

その特徴は、お店の中の仕組みが高まっているということです。

社員の受け入れ方、店長同士の役割の振り方、お客さんに楽しんでもらうための工夫など回数を重ねて長く運営することで、店長たちの工夫が、お店そのものに反映されているなあと感じます。

常設の良さは、こういうところだと思います。

全体の経験の積み重ねで、各お店の精度が向上し、こどもバザール全体の仕組みが整い、どんな子でも楽しい活動ができる場所になっていくというところにあります。

もうひとつ常設の良いところは、こども店長にとっても、遊びに来てくれる社員にとっても、学校でも家庭でもない。だけど、大人の目が届く居場所になっているという点です。

少し例をあげてみます。

まず社員さんのことですが、特別支援学校に通う子ども達が、夏休みは毎日、通常の土日なら毎週末とっていいほど遊びに来てくれます。

その子ども達は、だいたい5～6人から多い時で30名くらいになります。

子どもの数に応じて施設の職員さんがいらっやって、その子ができそうなお仕事を選んで体験して、帰りはお買いものをして帰っていきます。

もちろんできることには限りが出てしまいますが、分け隔てなく、行けば楽しめる場所ということで施設の職員さんからは認識して頂いています。

次に、頻繁に足を運んでくれる中学3年生の女の子。

彼女は学校では、ちょっと、なかなか難しいこともあって、嫌になることもあるけれど、ま・あ・る に来れば楽しく過ごせるし、スタッフさんにも本音を話せるし、来ている。と言っています。

ま・あ・る は児童相談所のような専門機関ではないので、直接的にできることというのは少ないですけども、でも、彼女の中でま・あ・る が一種のより所になっているということは、あるのではないかと思います。

ま・あ・る が出来たころ、2年生だった子が今年4年生になって店長をスタートしています。

店長にあこがれて低学年の子が社員活動がんばって、実際に店長になって自分の社員経験を存分に活かしています。

いまでも店長になりたくて、足しげく通う低学年の社員さんも少なくありません。

ちょっと準備リーダーズの頃の話を出してみてください。

準備リーダーズは、社員経験がない状態でいきなり店長になっています。

そのこともあってか、当時は自分たち店長だけの方がうまくできるから、社員が作った物は売れないから材料の無駄。というかなり残酷な意見を聞きました。

実際に社員を雇わない店長もいました。

でも社員経験を積んで店長になった子は、社員を受け入れないという発想そのものがありません。

今年の夏は社員さんがたくさん並んでいるから、社員の受入増やしていいよという店長さんも出てきました。

今は自分のやりたいことはもちろんやらせてもらって、それプラス、全体を見て遊びに来る社員さんのことを思いやりながら、仕事ができるようになっていっていると感じています。

それから、開館以来こどもバザールの開催日数は350日ほどなんですが、その中で一番来ている店長は220回、夏休みの35日間に30日来る店長がいました。

個人差はありますが、これ、スタッフ以上の日数なんですね。

スタッフ以上に来る子がいるってということで、すごく驚いています。

そこで店長にちょっと聞いてみました。

これは、全部の店長に聞いてみたんですが、こども店長は実際のところ、習い事を習うように、なにか技術が上達するようになるわけでもなく、学校のようにやれば成績に反映されたりとか、成績が上がるというわけではないのに、なんでそんなに店長をやってくれるのか。

答えはいろいろで、学校とかでは学べないことを学べるから。自分がリーダーになれるから。他の学校の友達ができるから。なんか和む。普通に楽しい。

普通に楽しいって、私は自分の子どもの頃に、そんな感覚が無かったので本当に簡単な言葉なんですけど、すごくいいなと思っています。

ついでに、ま・あ・る に来て自分が変わったなと感じたところはある？と聞いたところ、回答者の97%の子が、自分が変わったと感じていました。

例えば、働くことの大変さを知った。計算が早くなった。説明するのが上手だねと学校で言われた。自信を持ってしゃべれるようになった。等々ですね。

自分の変化に気付くってというのは、すごく大変なことだったりすると思うんですけど、それ以上に自分が変化しているってことを感じて、それを自分で説明できるってことがすごいなと思っています。

最後に開館当時4年生で、こども店長を始めた子がいまどうしているか。いまは中学1年生になって今でも ま・あ・る のジュニアボランティアとして、テストや部活の合間に、こどもバザールを手伝いに来てくれています。こども店長にとっては、中学生はすごく眩しい存在のようで、私は5年と6年の違いってそんなに変わんないだろうって思ってしまうんですが、なぜか中学1年生になると、先輩すごい。できる人。ということも店長がいて、中学生もちょっと先輩っぽいアドバイスをするようになって。そういうところが、すごく面白いなと思います。

実際の学校でも中1ギャップを埋めるために、小学校と中学校で交流するという授業を設けるところもありますが、ま・あ・る では、それが自然とそれが体験できているという点も常設ならではのあって、ま・あ・る が居場所になっているからではないかなと感じています。

長くなりましたが、これで ま・あ・る のこどものまち、こどもバザールの紹介を終わりにします。ありがとうございました。

お時間があるようでしたら、質問を受けたいと思います。

『すごく楽しく聞かせていただきました。本当に常設って素晴らしいなと。

ミニさくら4日間やって、毎日毎日、子ども達がまちを変えていく、お店を工夫して変わっていく、ミニミュンヘンではそれが1か月続いていく。それが1年続いてんだというのが、ものすごくいいなと聞いていたんですけど、ひとつ、チラシは貰えなかったんですけど、3階の壁で大きく引き伸ばしたポスターで、「はじめてのしょうてんがい」という企画を見つけたんですけど、子どもが、低学年はお買い物だけで、高学年、4年生から実際のお店に働きに行って、それで金貨を貰って、金貨で買い物ができるのが何時までです。というポスターを見つけたんですけど、どこかこの先で紹介してもらえればいいんですけど。』

「はじめてのしょうてんがい」というのは、実は商店街さんの主催事業で、ま・あ・るは共催、協力している立場にあります。商店街さんが主催なんですけれども、ちょっと大変なので実行委員会があります。そちらの方のお手伝いという立場で、ま・あ・るは参加をしています。

こちらはですね、ま・あ・る 通貨ではなくて「はじめてのしょうてんがい」実行委員会さんが作っている金貨＝エッグスコインというコインをお金の代わりに使うんですが、これが「はじめてのしょうてんがい」のイベントの日に限り、普通の日本円として使うことができます。それぞれの実店舗、刃物屋さんだったり、乾物屋さんだったり、干物屋さんだったり、いろんなところでお仕事をし、そこで貰えるお給料を金貨で貰えて、その金貨を持って、実際のお店で実際のお買い物ができるという仕組みになっています。

お買い物の低学年さんの方は、ポーチを引くとお買い物の指令が書いてあります。

物しか書いてないんですね。お店は書いてなくて、物しか書いてないので、しかもちょっと想像がつかないような物が書いてある。乾物屋さんでクッキーが売っているとか、そういうような感じなんですけど。なので、ちょっとずつ聞いていたりとか、ヒントを教えてもらわないと買えないようになっていて、それを実際に金貨で買いに行き、買った物の一つは持ち帰りができるというようなものになっています。

『それは5回目って書いてあったんですけども、ここが出来る前に商店街が始めていたら、そこに協力するようになったということですか？』

はい、そうです。

『すごい面白いなと思って、ありがとうございました。』

もし、最後もうひとかたいらっしゃるようでしたら、その質問を最後にさせていただきたいと思います。

『こどものまちを研究しております花輪と申します。

貴重なお話をありがとうございました。

きょう午前中に見させていただいたんですけども、その時に専門家とか企業の方がどのようにかかわっているのかなと思ひまして、薬屋さんが専門家として、企業として関わってらっしゃるのかなとイメージを持ったのですが、今年で薬屋さんとの協賛が終わると伺ひまして、その協賛の仕方も子ども達が関わっていたりするのか、協賛の設定の基準ですとか、現時点で間接的にでも直接的にでも関わられておられる協賛のものがあれば教えていただきたいと思ひます。』

こどもバザールの中の常設の店舗の中で、関わっている企業は薬局とミニロボ屋の2店舗になります。この協賛に関しては、子ども達がやりたいからというよりは先方のご提案のもと、それに甘えさせていただいているという形になっております。

ま・あ・る のこと全体としてみると、すごく多岐に渡って企業さんにはご協力いただいております。

ま・あ・る の中だけでも、今ここでは、ご紹介をしなかったんですけども、プロから学ぶ特別なお仕事として、1日限定のお仕事を開催しています。こちらは予約なしで普通にハローワークに並んで無料で、通常の1回20分なり30分のお仕事として体験できるプログラムとして、例えば塗装の会社に家具塗装のお仕事をお願いしたりだとか、航空関係の方の専門学校さんをお願いして航空関係のお仕事、キャビンアテンダさんだったりとかパイロットのお仕事とか、あとはパティシエのお仕事とか、本当にいろいろな職種のお仕事体験を、講座だどうしても事前予約制で参加費もかかってしまうんですけども、お仕事としてやることで無料で、その日に行きたい人が、がんばってハローワークに並びさえすればできるという形で展開しています。

他にも講座、さっき出てきたクラブ、プロジェクトそして学校の団体、それぞれに企業の協力があって事業を行っているというような状況です。

ありがとうございました。

こどもがつくるまち「Piccoli せんだい」

～ こどもたちの挑戦 ～

紹介団体 NPOピコせんサポーター

代表 齋藤まゆみ

副代表 櫻田智子 / 事務局 西塚孝平 / 事務局 大沼竜也

宮城県仙台市から参りましたNPOピコせんサポーターです。
今日は仙台市からピコせんキッズの子ども1名を含む6人で参りました。私が代表「まゆすけ」こと齋藤まゆみです。
まだ、5年目の団体ですので取組み紹介をさせていただくのは恐縮ですが、精一杯させていただきます。
どうぞよろしくお願いいたします。



画面は、先月9月20日から22日に行われたばかりのピコせん2015の写真です。

毎年事務局は、10名前後、本番は50名前後のサポーターで運営をしています。

今日は事務局の「ともちゃん」こと櫻田智子と、「にっしー」こと西塚孝平、「たっちゃん」こと大沼竜也の4人で紹介をさせていただきます。

まずは私（齋藤）の方から。

最初に私がこのピコせんを始めたきっかけから、少しだけお話させていただきたいと思います。

画面は2009年5月20日の朝日小学生新聞ですが、この当時私はこどもがつくるまちを知らなかった
ので、この記事を見た時にすごく楽しそうなイベントで、子どもが自分で考えて自分で行動すること
とても関心を持ちました。当時自分の子どもが、小1と小3でしたので、自分の子どもと照らし合わせ、
すごく興味を持ちました。

この記事を参考に、ドイツのミュンヘンの取組を調べようと思い、DVDを自分で取り寄せまして、こ
の記事のミニさくらさんにメールで問い合わせをしたことを思い出します。画面は仙台市で毎月発行さ
れている「市政だより」というものですが、当時、仙台市の区の中で唯一文化センターがなかった宮城
野区に、文化センターが建設されることになり、開館記念事業企画委員として活動することになりま
した。

そして、開館記念事業の中で子どものイベントを行う企画を考える時、先ほどの新聞記事をきっかけに
団体を立ち上げまして準備を始めました。しかし、こちらの施設は建設途中で東日本大震災のため開館
が1年半遅れ、2012年10月の開館となりました。

初めて企画したこども会議の体験デーは3月27日…、3月11日の東日本震災のため、残念ながら中
止となりました。当時のサポーターは本業が大変忙しくなりまして、半分以上のサポーターはピコせん
に関われなくなりました。

震災から約5ヶ月後、子ども達に連絡をしてみましたら、1名の子どもだけが震災の影響で引越され、
残りの18名の子ども達がそのまま参加してくれることになりまして、会議を無事スタートさせること
ができました。

震災後ということで地域のネットワークの重要性を強く感じましたし、子どもが決めたテーマは「人々
が助け合えるまち」でした。

無事に初めて本番を迎えましたが、震災で開催が延びた為プレイベントとして、他の会場で行いました。
ダンボールに手書きで書いてあるテーマの写真を見るたびに、原点を思い出し、困難を乗り越える、生
き抜く力、繋がる力の重要性をとて感じます。

では、改めましてピコせんについて紹介をさせていただきます。

ともちゃんの方からお願いします。

Piccoliせんだいについて軽くご説明いたします。
Piccoliとはイタリア語で「ミニ」の意味になります。

仙台の子ども達を集めて毎年1度、子どもがつくることもだけのまちを開催しております。
Piccoliせんだいでは、子ども達に「人の役に立つ喜びを感じてもらおう」ことを大きな目的として取り組んでおります。

これまでのPiccoliせんだいをご説明いたします。
画面は年度ごとの開催日、会場、参加人数、テーマを表しております。
2011年度に第1回目のピコせんを開催しました。震災の影響で開館が遅れてしまったため、最初はプレイベントとして1日だけ開催いたしました。それ以降、毎年たくさんの子ども達が参加してくれました。2012年度、2013年度に関しては宮城野区文化センターというところを、ほぼ全館貸し切って行いました。2013年度は、3日間で延べ1038名の参加がありました。いずれは「ミニ・ミュンヘン」のように3週間の大規模なピコせんにしていくことを目指しております。

テーマについては子ども達が考えたものです。最初の年のテーマは「人々が助け合うまち」。お互いに手を差し伸べ合い協力して生きていこう。そんな気持ちの表れを感じました。テーマには明るく・楽しく・笑顔で…という子ども達が描く理想のまちの姿が見えます。

子どもの関わり方には2つあって、ピコせんキッズという子ども実行委員がいます。企画から本番までの準備を行い、月に2回の子ども会議、通称「かたるっちゃ!!」に参加してピコせんのまちをどのようにしていくかについて話し合っていて決めます。
そして、会議の時には参加しませんが、ピコせんのまちの市民として参加する「ピコみん」がおります。それでは「かたるっちゃ!!」で子ども達がどんな話し合いをしているのかご紹介したいと思います。

たっちゃん、お願いします。

では僕から「かたるっちゃ!!」についての説明をしたいと思います。
まず、この「かたるっちゃ!!」とは何かというと、先程申し上げたとおり子どもの実行委員であるキッズ達が自分たちのまちについて語る場です。
今までは、このことを「子ども会議」と言っていたのですが、この「語る」場に仙台弁の語尾で「～っちゃ」という言葉があるので、これをかけて「かたるっちゃ!!」と、今年から呼ぶようにしています。

「かたるっちゃ!!」が最初に行われたのは2011年度です。
この年はピコせんの黎明期というのもあって、代表の自宅でやりました。
大学生や大人のサポーターの姿も見えますけど、あくまで主体は子どもで、子ども達だけで会議を進めています。その翌年2012年度は、先程話にあったように宮城野区文化センターというところが開館いたしましたので、そこで会議をしていました。ホワイトボードや付箋などを使って、本格的に子ども達が話し合いをしました。その次の年2013年度はより積極的に発言したりする中で、より良いまちはなんなのかということ子どもと一緒に追及していきました。
去年は意見を交換するだけではなく、絵をかいたりなど、ビジュアル的な活動も多く取り入れるようにしています。

具体的に、この「かたるっちゃ!!」の中で、子ども達がなにを話し合っていて、何が決まっているのかということの説明したいと思います。

今年を例にしてご説明します。
一番最初の「かたるっちゃ!!」では仲間を知ろうということで、自己紹介をしました。

自己紹介の次はまちのテーマを決めました。これは先ほど話にあったように、その年のピコセンのまちをつくるにあたって、どういうテーマを元にまちをつくっていかうかということ子ども達が決めます。例えば去年であったら芸術を楽しむ街。今年はエコ&スマイル。これも子ども達がつくったテーマです。

次にお金のデザインというところと、まちのルールを決めようというところについて説明したいと思います。

ピコセンでは、「ピコ」という単位の仮想通貨が使われています。このデザインは各年度ごとに異なるのですが、そのデザインはすべて子ども達が行いました。子ども達がデザインしたものを子ども達が見て、どれを今年のピコのデザインにしようかということで子ども達が選んで、それで印刷しました。

次にまちのルール。2015年、今年のルールの一つに「ホワイト企業をつくる」というのがありました。ブラック企業という言葉は子どもたちにも知られていることがわかりますね。他には「ムダづかいをしない」「子どもの数に検討をつけていろいろつくる」などがありました。これは今年のテーマがエコ&スマイルだったので、それに関連付けて子ども達がこういうふうにしたようです。このような感じで、お金のデザインからルールまで、子ども達で決めています。

続いて、まち並みづくりのワークショップが行われました。

ピコセンのまちでは景観を子ども達がつくっています。そのためのワークショップです。ちなみに今年は景観の中でも木をモチーフにしてワークショップを行いました。子ども達が、ひとりひとり小さい自分なりの木を、いろんな材料を使って木をつくりました。そして一人一人が作った小さい木を何本かまとめて統合して、ひとつの普通の木のサイズにつくっていきました。制作はすべて子ども達の創造性に任せて、どんな木がピコセンのまちにあったら楽しいだろうということを考えて作っています。

これが今年の景観の例ですけれども、それより去年とか、あるいはもっと前の例を紹介します。

まず第一回目。第一回目は先程の宮城野区文化センターが開館する前なので10-BOXという演劇等で使用する会場をお借りして行いました。黒い10個の箱からなる劇場なので、中には何も無い場所だったんですけど、子ども達が自分たちで考えて賑やかな風景を作りました。

2012年は、先程申し上げたように文化センターが完成したので、階段などいたるところに子ども達の工作物が飾られました。

2013年度も同様に、階段やホールに子ども達がつくった作品が置いてあります。

去年2014年度は宮城野区文化センター1階のシアターホールを貸し切って、天井も利用し、より立体的なまち並みを作りました。

このように景観と「かたるっちゃ!!」、今まで子ども達が本番に対してどのように話し合いをしてきたかというのを説明してきました。

次に2015年のピコセン本番が、どのようなものだったのか…、ということを説明したいと思います、その前に仕事体験について説明したいと思います。

私たちピコセンでは、本番の前に仕事に対する意識というものを子どもたちに考えてもらおうということで仕事体験を行っています。

その仕事体験について、にっしーの方から説明をしたいと思います。

それでは、私の方から仕事体験に関して説明をしていきたいと思います。

毎年Piccoliせんだいを開催する前に子ども達の夏休みを利用して仕事体験をしています。

参加対象者としては、ピコセンキッズとピコみんの両方でして、体験先としては主に地元の宮城野区のお店や施設となっております。

こちらの図になりますが、内側の円は仕事体験の目的を意味していて、外側の円はこの仕事体験を通して私たちが子どもたちに期待していることを表しています。

例えば地域とのつながりを通して、その地元、住んでいる地域の魅力を再発見して欲しいと私たちは期待していますし、あるいはPiccoliせんだいに活かすとありますが、これは先程の説明のように体験先が実際にPiccoliせんだいにあるお店や施設になりますから、このような体験は子ども達にとって本番のための事前の経験というものになっております。

例えば2012年ですと、ダンス、小道具づくり、あるいは映画館試写室。また、声優が代表的な体験先でした。普段の大人でさえ体験することのできない仕事に子ども達が挑戦していることがわかります。また2013年の3月は、東日本大震災の復興に向けて想いを形にするイベントが開催されました。このときにピコせんは「10年後自分たちはどんなまちに住みたいか」をテーマにして子ども達が理想のまちを想い、造る活動を行いました。この活動を通して、子ども達が持っている強さや元気といったものを宮城野区の地元の方々にお見せする役割もこの機会で行うことができました。

2013年度は、これは仕事体験とは少し焦点がずれてしまっていますが、Piccoliせんだいの本番の後に子ども達が仙台市外に赴いてまち探検を行いました。そのまち探検では、まちの中に必要なお店や施設としてこういったものがあるのか、あるいはそのお店や施設の役割とはなにかといったものを学ぶためにこのような場を設けました。このような企画では、子ども達の希望に沿ったものになるように努めています。また、大学見学もこの年に行いました。

2014年度ですと、裁判所や銀行などが挙げられます。この時に銀行に参加した子どもの感想に次のようなことが書かれていました。「計算するのが大変だったけど、最後はやり遂げて計算することができて良かった。Piccoliせんだいの本番では、記帳や約束手形の記入をがんばりたい」と書いてありまして、銀行の仕組みを理解することは小学生にとってはもちろん、中学生や高校生でも簡単ではないでしょう。ただ毎年、写真にも写っているように実際に銀行の職員さんが銀行業務を教えに来て下さっていて、そのサポートもありまして、毎年子ども達が継続して楽しい学びを続けることができております。今年度の代表的な仕事体験場所としまして、警察署やラジオ局などが挙げられます。仕事体験では子ども達にとって、ただ単に仕事をして楽しかった、面白かったで終わらせるのではなく、最後に職場の方々にインタビューを行うことも特徴的です。例えば、この仕事を始めたきっかけはなんですか、この仕事をしていて大変な事や大切なことはなんですか、また、働くこととはどういう意味ですかなど、子ども達がインタラクティブな受け取りを行い、インタビューを通して、お仕事に対するイメージや創造性を高めて欲しい、そういう想いで企画しております。

それでは「かたるっちゃ!!」やお仕事体験を通して、いよいよ本番に向かいます。

それではともちゃん、説明お願いいたします。

では、本番の様子について今からご説明いたします。

第1回目は震災の影響で、開催に大幅に遅れが出てしまったものの、初めてのピコせんにはおよそ150名の子ども達が集まってくれました。子どもにとっても初めての体験だったと思いますが、積極的に仕事をしたり、お買い物を楽しむ様子がありました。子ども達からは「とても楽しくて時間が過ぎるのがあっという間だった」という声や「行列ができるチョコバナナ屋を2回やった。またやりたい。」などの感想を貰いました。初めての開催はあいにくの雨でしたが、心から楽しかったと言ってくれる子ども達がたくさんいて、震災で傷ついた子ども達もいきいきと輝いておりました。

2回目のピコせんは、宮城野区文化センターの開館記念事業として全館貸切で行われました。1回目の倍以上の子ども達が参加し、館内がピコせん一色に。とっても賑やかになりました。子ども達の声、「いろんなものを売ったら黒字になった。」「自分の考えたメニューが売れてよかった。」「商品が少なくなって売れるものがなく、急いで作らなければならなくなった。しかし、みんなで力を合わせてつくってチームワークが大切だと思いました。」などがありました。

実際にやってみると思い通りにならないことがありますが、それを乗り越える方法を子ども自身が自分で見つけるということも、ピコせんでの学びだと思えます。

第3回目は3日間行い、子ども達も十分に楽しめたようです。

「3日間いろんな仕事ができ楽しかった。」「従業員の子が3日間同じで、仲良くなれてうれしかった。」などの声がありました。子どもの一番の思い出として「お客さんが店から出て行く時、楽しかったと言ってくれてうれしかった。」「駄菓子などを売ってみんなに喜んでもらった。」「商品が完売してよかった。」などが挙がりました。

それぞれエピソードは違えども、お仕事を通じてお客さんを満足させることや自分のがんばりが結果として返ってくることに喜びを感じたと思います。

第4回目はピコせんの中に3つの区が誕生しました。それぞれ区ごとに、まとまりを意識しながら生活することが出来ていたようです。さらに、初めて市長が選出され、市議会を開くなど3日間しっかりと市長を務めてくれました。また、新しく劇場が設置され、子どもも劇団の方々と協力して劇場の運営を行いました。

子ども達の声には、「自分たちで決めた音楽がまちで流れていることに感動した。」「みんなでゴミを片づけたり、いろいろなところをピカピカにできた。」「銀行にお客さんが一杯来て、両替などをしたのが楽しかった。」など、それまでの経験にないことにも、いろいろと挑戦できるのがピコせんの楽しみの1つです。子どもたちが働くことで、達成感はとても大きかったのではないのでしょうか。

第5回目は、先月9月に開催されたばかりです。今回は屋外も利用して挑戦しました。また、劇場では子どもも演劇に挑戦し、劇団の方からはセリフが完璧だと大絶賛でした。

。

ピコせんのまちで、子ども達は何度か失敗も経験します。しかし、失敗してもチャレンジすることで、できるようになったこともたくさんあると思います。子どものコメントの中には、「初めは細長い綿あめしかできなかったけど、うまく作れるようになった。」「難しい給料の取り扱いができるようになった。」「お客さんやお店の人と仲良くなれなかったけど、今は仲良くなった。」「お店のお金が無くなって給料が払えなくなったけれど、時給を下げたらできた。」などのエピソードがありました。

失敗したことや苦手なことに前向きに取り組む気持ちや普段見えなかった責任感を子ども達の姿から感じることができました。

本番は終わりましたが、今年はまだ「まなぶっちゃ!!」という企画が残っています。

その「まなぶっちゃ!!」という説明をにっしーからお願いします。

Piccoliせんだいの本番が終わった後でも、私達は月に1回ほどのペースで子どもたちが社会体験ができる「まなぶっちゃ!!」というプログラムをつくっています。

こちら先程の仕事体験と同じ図になりますが内側が目的で外側が期待することになっています。

この特徴的な点については、私達がこの活動を通して、子どもたちに学びの場や居場所づくりを提供しているということ、また地元で地域づくりの担い手になってほしいという期待を込めています。

こちらはピコせんキッズが考えた「まなぶっちゃ!!」の一部になっております。例えば左下の「パソコンで漫画をつくる」をはじめ、できる限り子ども達の希望に沿った企画が立てられるように努めています。

こちらが今年度実施する予定の「まなぶっちゃ!!」の一覧になります。

アーツや国際交流あるいは世代間交流などのように様々な教育的なカテゴリーを立てて、それを企画しながら子どもたちが主体的に「まなぶっちゃ!!」、学ぶ環境を私達は用意しています。

こちらは具体的な活動例になります。

アルカス劇として中学生が演者となって3回ほど稽古をいたしました。このアルカス劇はいわゆる防犯劇になりますが、こちらはPiccoliせんだいの前夜祭の時に小学生に対して劇を発表しました。小学生に対して、次のステップになる中学生との交流は、お互いにとって有意義な活動になり、お互いにとっても刺激を受け合う良い経験になったのではないかと思います。

これまで「子ども達の挑戦」と題しまして、ピコセンの活動を説明してまいりました。

生き抜く力や繋がる力をどのように育むことができるのかという問いに対して、私達がこれまで説明してきたピコセンの1年間の充実した活動にその答えが見出されていることを信じています。

ただ、もちろん挑戦には失敗がつきものです。子ども達が安心して失敗できる場をつくる必要がありますし、子ども達が困難を乗り越えようとしている時にそっとサポートすることも大切になります。

挑戦するのは子ども達だけではありません。私達サポーターも子ども達と一緒に、日々挑戦をし続けています。

以上で私達、NPOピコセンサポーターの説明を終わらせていただきます。

御清聴ありがとうございました。

こどもと女子大生のつくるこどものまち ～ 相模大野のこどものまちが出来るまで ～



紹介団体 相模大野のこどものまち実行委員会
事務局長 山家昌則
実行委員長 小林彩加（相模女子大学）
実行委員長 豊島千里（相模女子大学）
実行副委員長 大平真結（相模女子大学）
実行副委員長 倉橋菜都美（相模女子大学）

相模原のこどものまちを主催しております、山家と申します。

きょうは相模大野のこどものまちの実行委員会から特に面白い4人組を…あっ違った。ごめん。

実行委員長と副委員長を連れて参りました。

実行委員長は社会マネジメント学科の小林彩加、豊島千里です。

副実行委員長の食物栄養学科、倉橋菜都美、子ども教育学科の大平真結の4人でこれから相模大野のこどものまち実行委員会の取組紹介をさせていただきたいと思います。

ここから実行委員長の豊島千里が説明させていただきたいと思います。

豊島千里、千里なので「ちーちゃん」と、みなさん、もし会ったら呼んでください。

みなさん相模原市ってご存知でしょうか。

知ってるよって方。すごい。思いのほかいっぱい、ありがとうございます。

でも、ご存じない方もいらっしゃるかと思いますので、ここで今、覚えて帰ってくださいね。

相模原市は関東地方、東京都の下にある神奈川県北部にあります。

神奈川県の中では、2番目の広さがあります。

そして、神奈川県の中には政令指定都市が3つあり、横浜市川崎市に続いて5年前に政令指定都市になったばかりです。政令指定都市といえば、こちら静岡市さんも同じ政令指定都市です。

やっと共通点が見えてきました。

そんな静岡市さんと同じ相模原市なんですが、静岡市さんの特産品…名物があるんですね。

行きましたよ、私たち。まぐろ祭りを駅前で行われていたんですが、午前中行ってきました。

そこでまぐろ…まぐろ丼、たくさん食べましたね。

なにがおいしかったのかな。

やっぱりまぐろですよ、まぐろ祭りですから。

まぐろ丼もありました。

まぐろ祭り、まぐろがとてもおいしいです。

みなさん、ぜひ来年も行っていただけたらいいと思います。

それでは相模原市の話に戻しましょう。

そんな相模原市は静岡市に負けずに名産品があります。

名産品が3つあるんですが、1つ目がやまといも、2つ目がたまご、あと1個あるんです。

やまといも、たまごときたらあと1個、なにか想像がつく方はいらっしゃいますか？

難しい。難しいかな。

ダチョウなんです。

やまといも、たまご、ダチョウ、この3つが名産となっております。

覚えてください。

相模原市のこどものまち、実は政令指定都市になった年に生まれました。
同じ5年目です。相模原市が政令指定都市になって区制になり、南区、中央区、緑区の3つの区ができました。

この3つの区の中の南区というところに相模原大野という地名があります。

そこに私達学生と子ども達が一緒につくるこどものまち「エンジョイスマイルさがみ」というものがあります。

そして相模大野は南区の中心的な街であり4つの商店街、伊勢丹、ポーノ相模大野などがあります。
小田急線相模大野駅を中心に発展していて新宿から小田急線で40分、羽田空港から空港バスで60分という、とても便利なところです。

そこまで便利じゃなかったか。

でも、便利です。

その相模大野の駅から徒歩10分のところに私達の相模女子大学があります。

相模女子大学は日本で4番目に古い女子大学で、1,2,3位に入れなくて残念だったところもあるんですが…残念ですね。

幼稚部、小学部、中学部、高等部、大学、短大部、大学院のすべての学校を取り揃えております。
キャンパス内にはいろいろな施設がありまして、その中の1つ、ひときわ目立つガラス張りの建物、マーガレットホール、これですね。

マーガレットホールという建物全館を使いまして相模大野のこどものまちを開催しています。

ここから副委員長の「くら」こと倉橋菜都美が説明させていただきます。

相模大野のこどものまち「エンジョイスマイルさがみ」は今年で3年目になります。

今年は8月8日、9日の2日間相模女子大学で開催しました。

会場はマーガレットホール全館を使っています。

会場レイアウトは、このように商店街と工房街、飲食店街は2階に、教育機関が3階、役所など公共機関や公益機関、ステージは4階に設置しています。

各階の移動は階段を使い、右側通行をルールとしています。

相模大野では、専門家のブース以外はすべて学生が運営します。

それぞれが担当するブースの企画から運営までを、一人の学生が責任を持ってつくっていきます。

専門家として公共機関の神奈川県警、相模原消防局、相模原市資源循環推進課を始め、ケーキ屋、食堂、ホームページ制作、むかしあそび、相模女子大学こども教育学科、相模女子大学短期大学部食物栄養学科などの皆さんに協力を得ています。

もちろん協力依頼には、私達学生も進んでお願いに行きました。

今年は子ども達が約360名参加しました。

その子ども達の活動を支えるスタッフは、学生が94名、専門家は18名、事務局が4名、大学職員が2名、看護師1名です。

この実行委員会の中心になる運営委員会の愛称が「SA! GA! JYO! 10!」（サ・ガ・ジョ・テン）です。

この名称は社会マネジメント学科の松下先生が、地域貢献先に行った学生たちに名付けたのが始まりです。

初めて名付けたのは、お隣の焼津市での活動に行った時の5名のゼミ学生達に使われたそうです。

運営委員は相模女子大学の学生やOGです。

今年は12名でイベントを運営しました。

それぞれ得意分野があり、私達を含め個性豊かです。その運営委員会を中心に運営委員会を支える大人のスタッフの事務局、公共公益機関を担当するお役所チーム、工房、商店街を担当するよろずやAチーム、ステージなどイベントを担当するよろずやBチーム、飲食店を担当するおいしいチームで実行委員会を構成しています。

各チームには運営委員がリーダーとなり、チームの学生を引っ張ります。

各チームに店長役の実行委員、アシスタントの当日ボランティアが配置されます。

各お店は学生実行委員と子ども市長、子ども議員が経営をしています。

次は「まゆ」さんに相模女子大学の学生が関わる特徴を説明してもらいます。

副委員長の大平真結です。

私からは相模女子大学の学生が関わっていることの特徴を説明させていただきます。

実行委員会には相模女子大学の学生が多く参加しています。高等部をはじめ、社会マネジメント学科、食物栄養学科、管理栄養学科、健康栄養学科、日本語日本文学科、私のいる子ども教育学科の学生になります。

学生達はそれぞれ専門学科を活かせる担当ブースを選びます。

また、大学構内での開催ですのでお手軽ボランティアとしても学生が集まりやすいです。

相模女子大学は地域貢献度全国女子大4年連続1位の実績があります。

さて、エンジョイスマイルさがみでは高等部の学生がとても元気で行動力があり、子ども達と同化して一緒に遊びます。

こどものまちはあそびのまちと理解して、イベント中はあそびつくし、子ども達と一緒に盛り上がっていました。

大学生は各学科の得意な事や学校で習ったことを活かして体験できることが学びに繋がっています。

子ども教育学科の学生は子ども達と一緒にあそぶことで子ども達の本当の探究心とはなにかなどを知る機会にもなります。

食物栄養学科など食品に携わる学生達は実際に食品のブースで子ども達に対し食べ物の安全を考え食品衛生に配慮しました。

また、食堂とともに子ども達へ提供するメニューなども考えました。

社会マネジメント学科の学生は実行委員会やイベントの運営マネジメントの実践の場となり自分たちの活動で自信を付けます。

他にも子ども達と一緒に活動することで得られる生で学べることが私達にとっても勉強になります。

相模大野のこどものまちでは学生だけで内容を決めていくのではなく、実際に子ども市長や子ども議員達と一緒に内容を検討したり、お店やイベントを構成していきます。

子ども達とともに活動をすることで私たち学生も一緒に成長できる機会になります。

また、子ども達と私達学生が、このイベントを運営することで主体的に活動でき、自立して活躍できるという自信に繋がっています。

次は事業の流れなどの説明です。

「あや」お願いします。

ここからは新潟県出身の小林彩加が、メンバーの紹介や事業の流れをイベント中の写真を使って説明させていただきます。

まず、実行委員会での最高議決機関として運営委員会があります。

このメンバーは12名。実行委員長こちら2名と副委員長こちら2名、そのほかに8名の運営委員で構成されています。

全員が相模女子大学の学生及びOGとなります。

また、まちに構成する施設を企画から運営までを行う学生実行委員は24名。子ども市長、議員が12名で36名の実行委員と運営委員12名の計48名がエンジョイスマイルさがみのまちづくりをします。

他に相模女子大学こどものまち校という教育機関を担当する学生が12名協力しています。

当日、学生ボランティアは46名。相模大野近隣の高校生や大学生が参加しています。

大学職員はじめ大人の方々には、私たちの縁の下での力持ちとして活動を支援いただいております。実際に、こちら前にいる山家さんたちのフォローはどうでした？

そうですね。

とても助かりました。

ここで止まっちゃうとなにもしなかったみたいになってしまうので…

あるんですけど、いろいろありすぎて…

具体的に。

やっぱり、私たち学生だけだと子どもたちがね。

こういうものをつくったり、パワーポイントとかも作ったりできないですし、あと事務連絡とかお願いしていたんですけど、来年からは自分たちも積極的にやっていこうかなと思いました。

このようにいろいろ細かいところ、私達の手が届きにくい細かいところを助けていただきながら活動することができました。

次にイベントまでの流れです。

毎月必要に応じて運営委員会を開催して、運営についての話し合いを行います。

実行委員会は毎月1回開催、全4回開催します。

第2回までは、まちにつくるお店の企画や内容検討です。

残りの2回は小道具などの準備を進めました。

学生たちの準備が進み、いよいよこどものまちの募集を開始します。

展示の準備では、レイアウトなど大人の人につくっていただきました。

ブースやまちの景観は学生とこどもで飾り付けします。

相模大野のこどものまちでは、小学4年生から中学3年生の子どもが対象です。

また、施設の都合上、定員を350名としています。

開催日の1か月前に近隣小学校へちらしの配布やインターネット上のブログで募集をします。

参加資格は基本、相模大野の近隣の子どもですが、横浜市、町田市、綾瀬市、多摩市、平塚市、大和市、海老名市、厚木市などからも子ども達がたくさん申し込みをしてくれます。

今年も抽選で350名の子ども達が参加しました。

抽選で当選した子ども達には事前に市民証、相模大野のこどものまちの紙幣である5さがミニが郵送されます。

さがミニ札といえば、お札づくりにはどんな思い出が？…

ひとつのお札が6個連なった状態で紙に1枚になっていて、それがドン！と私たちのところに渡されて、それを学生みんなが協力してチョキチョキしたんですよ。

地道にね。大きなカッターまで使って、丸2日かけて…すごい量のお札を…ぐわって。手作りだったので、あまりに汚くて…

そして他には、子ども市民あて注意事項、保護者あて注意事項、大学内マップ、市長立候補申請書、保護者お迎え有効証が郵送されます。

子ども達は市民証を大学生も入口の警備室に提示し大学内に入っていきます。

保護者の方は正門から中へは入れません。

正門から構内には学生が立ち、こどものまちへの入口へ案内します。

受付はID番号で管理します。

参加費は500円です。

受付でチェックしたら、いよいよこどものまちへと入ります。

4階の集まる広場に全員が集まります。

そこで参加者全員であそび方の説明、こどものまちの約束、施設の使い方のルールを説明します。

説明が終わると子ども達はまちであそび始めます。

職業紹介所はエールワークといいます。

30分と60分の働くしごとがあります。

「くら」、エールワークを担当していましたが何が一番印象的でしたか？

こどものまちが始まって、すぐに子ども達が来る場所なんで、子どもの対応に追われていました。子どもがね、ぐわーって来るからね。

そして子ども達の給料は30分働くと30さがミニ、60分働くと60さがミニが貰えます。

また、大学で専門課程を修了して、その専門のしごとに付くと倍額の給料になります。

給料はさがじょ銀行で支払われます。

「まゆ」がさがじょ銀行を担当したけど、なにが大変だった？

お給料が専門機関ではたらくと倍になるっていうのが、子どもたちにとっては結構考え方が難しかったようで、6人位の子どもたちが一気にはたらいっているんですけども、この子はそれを理解できていて、この子はあまり理解できていなかったりしたので、お給料を倍貰った子と、貰えなかった子が出て、そういう点は反省点だったかなと思います。

結構新しい試みだったからね。

そう、来年に向けてそこは改善していくべきかなと思います。

ありがとうございます。

給料を貰ったらさがみ税務署へ税金を払いに行きます。

税金を払っていないと次のしごとを紹介してくれません。

相模大野のこどものまちは公共機関の無料サービスが多いので、とっても税金が高いのです。

30さがミニの給料を貰うと、なんと20さがミニも取られるんです。

もちろん60さがミニの給料では40さがミニも取られます。

この税率は子ども議会で決定しています。

実際に、この日本で起きたら海外に逃げちゃいたくなるような税率です。

子ども達には申し訳ないですけど。

税金を支払った残りがまちであそぶお金になります。

まちでは飲食店があり、大学の食堂も協力していただいております。

ケーキ屋さんも本物のパティシエが来てケーキの指導をしてくれて、ミニケーキをつかって販売しています。

子どもや学生がつくる屋台も好評です。

また、工房ではアクセサリやプラ板、ポストカード、むかしあそびのおもちゃなどがつくられ販売されます。

金魚すくいやカジノなどのゲームもあります。

写真屋さんでは高等部の制服を着てコスプレ写真が撮れます。

なにが楽しかった？

私は2日目にやりました、ビンゴ大会をやりましたね。

楽しかったです。

一番人が来たね。たぶん、そんな印象だった。

相模大野の子どもはね、景品出ると来るからね。

はい？

だまっとこか？

だまっとこね。

他には相模女子大学のマスコットキャラクターの「さがっば・ジョー」のグッズショップもつきました。大人気でとてもにぎわいました。

公共機関の専門家の消防署や警察署も、やはり大人気で、子ども達みんな真剣におしごとをしていました。

最後に各日のフィナーレでみんなで集まりイベントを行います。

1日目のフィナーレではこども市民達全員で広場に集まり、市民が気付いたまちの課題として市長への手紙で出された内容を話し合うこども議会があります。

市長や議員は全市民の前で話し合い、内容を考え決めていきます。

決まった内容は翌日のこどものまちに活かされます。

また市長候補者の立ち会い演説会があり、その後投票があります。

2日目のフィナーレでは市長選挙の結果と認証式がありイベント終了後、みんなで記念写真を撮り学生みんなで子ども達をお見送りします。

出口では、この「さがっば・ジョー」がお見送りをします。

このような流れで相模大野のこどものまちは開催されています。

私達はこの事業で人と人との繋がり Face to Face 楽しいの共有を大切にしています。

運営委員会や実行委員会、イベント中は学生同士楽しく笑顔あふれる時間なんです。

それが、子ども達が決めたこのまちの名前である「エンジョイ スマイルさがみ」に繋がっていることなんだと思います。

みなさん、子どもと女子大生がつくるこどものまち、相模大野のこどものまちへ是非一度ご来場ください。

お待ちしておりますーす！！

全国こどものまちサミット in 静岡 こどものまちの取組紹介

子どもがつくるこどものまち ミニ☆大阪

～ 変わってきたこと、変わらないこと、そして未来へ ～



紹介団体 ミニ☆大阪実行委員会 代表 二葉 智代

ミニ☆大阪の二葉と申します。

素晴らしい報告が相次ぎ、うちのこどものまちは小規模でございますので恐縮しつつ、でも、この場を楽しみたいと思います。

さて、自分の順番を待ちながら、皆さんの報告を

拝見していると、どんな人（主催者）が、どんな願いを持ち、どんな環境で、どんな仲間と、こどものまちを始めるかによって、いろんなこどものまちの在り方があるのだと感じました。「ミニ・ミュンヘンをモデルに」と同じ一言を発しても、ミニ・ミュンヘンのどこに強い憧れを抱いたか。それによって、展開の仕方、困ったときの解決の仕方は違うんだなということに改めて思いました。「私は、ミニ・ミュンヘンのどこに強い憧れをもっていたんだろう」ということをふりかえりながら聞いていたので、今日は、その辺も織り交ぜたいと思います。

ミニ☆大阪は今年で8年目の活動です。まだ8年目ですが、ちょうど今、いろいろと変わる時を迎えておりますので、あえて「変わってきたこと、変わらないこと、そして未来へ」というタイトルを付けさせていただきました。ミニ☆大阪は、もともと児童館の一事業から始まりました。私が昔、大阪府立の児童館の職員をしておりまして、その児童館の中で出会う子ども達と向き合う中で、子どもとともに、子どもの声を聴きながら創る事業をなにかしたいと思っておりました。そんな時に四日市のとある本屋さんでミニ・ミュンヘンの記事に出会いました。そこでいろいろと話を聞いている中、私が特に心が奪われたのは、大きく2つありまして、1つはミニ・ミュンヘンというこどものまちが市の予算の関係で、無くなってしまうかもしれないという危機に瀕した時、子ども達が立ち上がり「私たちのミニシティを無くさないで」と、子どもがアクションを起こしたというエピソードです。どんな日々を過ごしていたら、どんな事業を展開していたら、そんな子ども達が育つだろうと興味をもったことがひとつ。その後、DVDを取り寄せて見ると、喧嘩アカデミーというのがありまして、喧嘩アカデミーの中に書かれている言葉にとっても感動しました。一言でいうと喧嘩アカデミーっていうのは、うまく喧嘩する方法を子ども達が考え、それを言語化しているんです。それも「喧嘩したらあかんよ」じゃなくて「どうしたらうまく喧嘩できるのかな」という視点から。例えば「話を本当にわかってもらえるように、大きな声を出さずに普通の声で話します」とか「耳を塞ぎません。塞ぐと人が言っていることが聞き取りにくくなります」とか。いいなあ～と思いました。こんなことを児童館でこそやってみたいと思い、ミニ・ミュンヘンならぬミニ☆大阪を始めることにしました。

子ども達に「ミニ☆大阪っていうのをやろうよ」と言ったとき、私が想像していた以上に子ども達が食いつきました。中でも食いついたのは「子どもがつくる」というところでした。子ども達は「僕らに全部まかせてくれるん？まかせて、まかせて、こんなを待ってた！」みたいな感じで。だからすごく、子ども実行委員達はがんばって準備をしてくれました。

そして迎えた本番。

当日に来てくれたボランティアさん達はとても丁寧で、とても親切で……。担当者の私からすれば感謝する存在でした。

しかし、子どもたちにとっては、困ってないのに困ってると思って助けてくれる場面が多かったらしく。子ども達は「任せてくれるっていったのに、話がちがう」というわけです。木下先生の冒頭のお話で「大人といい出会いをしてきたか」というお話があったと思うんですが、そういう意味において、最初の子ども実行委員の子ども達の中には、あまり大人といい出会いをしてない子もたくさんいました。ですから「任せてくれるって言ったのに！」と子ども達が1日目の終わりのミーティングで怒りだしたわけです。で、翌朝、早くから集まり自主的にミーティングを始めたのはいいのですが、昨日の余韻から子ども達が、ホワイトボードに「大人むかつく、調子のりすぎっ」って書きちゃった。そんなときに「準備から手伝ってあげよう」と、約束の時刻よりうんと早くに集まってくれた大人達が「おっ、がんばってるな」とにこやかにきて、ホワイトボードを見たら、そんなことが書いて子ども達が議論をしている。はぁー!!!です。大人達は「なんやねん。二葉さんが言いたかった、実現したかったっていうのはこういうことかいな！」と怒る人と「待ってた、待ってた。こんなん待ってた。いい展開。今まではなかったよね」と応援してくれる人に別れました。

ミニ☆大阪はそんなふうにも初回が始まりました。実は、今そこに座っている3年生の娘が1歳の時に、私は児童館をやめようと思って、やめる年にこの「ミニ☆大阪」という事業をしたので、本当は1回きりのものとして、一旦終わったんですね。でも、子ども達がそこで「大人と子どもの関係を問う」という宿題を残したので、それも踏まえ「もう一度、やりたいな」「ミニ・ミュンヘン行ってみたいな」「智代ちゃん暇になったんやったら、もういっぺんミニ☆大阪しよう」と、子ども達から「やりたい」の声が上がりました。で、支えてくれた大人の中にも「やるなら応援するよ」という人たちが声をかけてくれて。で、「やるのはいいけど、お金ないよ。どうする？」と、これを機に助成金の書き方を子ども達に伝え、子ども達と企画書を作成、無事にソニーの助成金が取れ…子どもの声で児童館の一事業から始まったといういきさつがあります。

そんな訳で、ミニ☆大阪実行委員会には、子ども実行委員会と大人実行委員会があります。この大人の中には“8年前から大人だった人”と“8年前は子どもで今は大人になった人”。そして今日、次の実行委員長になってくれる野津君が来てくれているんですが“子ども達がつくったまちにボランティアに来て「わっ！ちょっとやってみようかな」って思ってくれた大人”といういろんな大人がいます。あと、このミニ☆大阪実行委員会の特徴がもう一つあって、それは実行委員会の最高組織は子ども実行委員会なのです。大人と一緒に考えることはあっても決断するのはすべて子どもです。本当に小さなことなんですけど、例えば、今いろんな子どものまちを見ていると、お仕事ブースが手作りの壁で仕切られていましたよね。「こんなん素敵やなあ。ミニ☆大阪にもいいんちがう？」と私が思って、子ども達に「こんなの素敵やったで〜」と報告したとします。でも「こんなんいらんやろ、べつに」って子どもに言われてしまったら、もうおしまい。子どもから「こんなんあってほしい」って思ったら生まれるけれど、子ども達にそれはいらんって言われたら、私が困ったり、欲しいだけの問題で、子ども達は求めていないので却下・・・というような、ちょっと究極の形です。この究極のやり方にこだわったのは、私が府立の児童館職員だったということがあります。以前は、目の前の子どもと、どんなに楽しいおしゃべりをしていも「いいね、いいね素敵だね」と相手に散々言いながら「だけど（もう起案がとおっていて、事業が決まっているから）また来年ね」という風に、大人の事情で、今、すぐそこで進めなかったことが多々あったので、ミニ☆大阪ではそこにこだわり、子どもの声で動かしていきたいなと思いました。

ミニ☆大阪が大切にしていること。これは最初に考えたことなんですが、社会の仕組みに気付くとかまちづくりというよりは、「子ども達一人ひとりが夢中になって楽しみ、自分ってすごいなを実感できる場」として大切に場を育てたくて。自分の思いをカタチにすることで、ミニ☆大阪を通して“自分がなにかを変えていける存在”だっていうことを、その子自身にしてほしかった。誰かがあなたのことをそう言っているとか思っているっていうんじゃないくて“自分で自分のすごさに気づく”“自分にOKが出せる”ということが重要だったので、目的の一つに据えま

した。ミニ・ミュンヘンに行ったとき、カーラさんが「ミニ・ミュンヘンをつくらなくていいのよ。あなたが出会っている目の前の子どもと、場を開いたらいいのよ」って言うてくださったことが支えでした。また、ミニ・ミュンヘンで、ミニ・ミュンヘンの根っこには、徹底した遊びと子どもと大人の信頼関係を感じたので、そこを大切にしたいなと思って進めてきました。

キャッチコピーは子ども達が、もうどんだけ話すねん！っていうくらい議論し「子どもがつくる子どものための子どものまちミニ☆大阪」「子どもがつくる子どものまちミニ☆大阪」となりました。

次は開催概要ですが、うちは毎月3月末の週末にやります。堺市立梅文化会館という公民館のようなところを借ります。参加者は100名程度で財源は最初助成金を取っていたんですけど、思いのほか、支え手の大人達が忙しくなってしまったので、今は参加者負担金ということで細々とやっています。このチラシは、子ども達から毎年「チラシ描いてもいい？」っていつ描いてきてくれるんですけども、ところどころに言葉が織り交ぜられていて。「ああこんなふうに子ども達は思っているんやな」って、いつもチラシを見て感じています。

で、ミニ☆大阪ですね。写真を見ながら進めますね。これが子ども実行委員会。最初の実行委員の様子です。もともとは中高生が支えていました。最初の素晴らしい人間関係から始まったことが象徴されるように、子ども達が会議をしているんですけど、その見守り（聴き役）の大人は子どもが信頼した大人が、1人～2人だけ入れるみたいな、そんな感じで。すごいでしょ。そうすると余計「私は呼ばれないけど、どういうことって」他の大人から言われるんですけど…まあまあ。…私？ 私もおかげさまで、入らせてもらっていました。ここに写っている彼は小学校の先生です。ちなみに、ここにうつっている子ども達の中から今は3人が教員としてって、現場でがんばっています。子ども会議では、考えたことはまずやってみます。あるときは「ちょっとやっぱり、大人と仲良くなるといたほうが本番までにいいんちゃう」という声があり、真ん中はギターを弾く会とか、ちょっと不思議な会を企画して、当日のボランティアさんと先に出会い、仲良くなる会を企画した年もあります。左上は「会議は夏からやったほうがええんちゃう？」ってことで、夏から始めてみたり。下は料理メニューの試作。「ちょっと1回やってみた方がいいかも。時間が読めるかもよ」という声がでて試作をしたり。こっちは当日に来てくれるボランティアさんに、子ども達が説明会を開いている風景。ちなみに私のこの日の役割は、この説明会の最後に出てゆき「今、話をされた以外はなにも決まっております。いい意味で、私に聞かれてもわからないので、当日、ご不明な点は私ではなく子ども達に聞いてください」と頭を下げて、場を繋ぐ、、という役割の代表です。

子ども達は自分たちのつくったまちに「地域の子供達が楽しみにしてあそびに来る」ってことをとても楽しみにしてくれていて。いつもミニ☆大阪が終わった後、これは2日の内の1日目の終わりの風景なんですけれども「あれ、いないな？」と思ったら自分たちで集まってふり返しをしてくれていました。

そんな子たちがですね、ある年「当日に来た子ども達がお客さんになっている気がする。子どもがつくる子どものまちやのに」「うちらもだんだん年取ってきたから子どもの気持ちが変わらなくなってきたんちゃうか」ということで小学生をスタッフに入れようということになりました。

当事者の視線で声を聞こうという自然な発想がすごく素敵やなあと思いました。で、今は高校生、大学生たちが、小学生の子ども会議をサポートしています。これは、ミニ☆大阪のある日の会議の風景なんですけれども、とっても緩やかな感じの会議でしょ（笑）。小学生の子ども達が入ってくれたことで、今までなかった面白いことがいろいろ起きます。例えば、これはある日の風景。A君という子なんですけれども、漫画みたいに、15分くらいこの状態から動かないんです。でも、なにかをすごく考えていて。なんか困ってるのかな？と思ひまして。私、近くにいて「A君なんか困ってる？困ったらお助けマン呼ぼうか？」とか言ったんです。そしたら「うーん呼んでくれー」とかいうんですよ。で、呼ぶとお兄ちゃんがこうして応援に来るわけですね。で、A君が

いろんなことをいっぱいお兄ちゃんに話したんですね。その相談がまたステキで。「あのさ、聞いてくれる？なにがわからないかわからないんだ。どうしよう、もしかして全部わからないかも…」って。これ、なかなか言えないことですよね。それで「大変だよ〜」ってお兄ちゃんが共感すると、「うーん大変だよ〜」と本人、自分に確認。で「手伝ってくれる？」って、はじめてそこで自分からSOSが出せ、ことが進んだってことがあったんです。私、この2人のこの会話を聞いていた時に「もうできひんから、なんかして」じゃなくて「手伝ってくれるっ？」っていうのは、解決の主体はAちゃん自身が持っているということなので「ああ、すごくいい助けの求め方やなあ。素敵やな」と思ってその場面を眺めていました。

最初に子ども実行委員をしていた子達が、今は社会人となり、お手伝いに来てくれ、新たな学生が来てくれ、子ども会議が今も続いています。今は、中高生〜小学生、特に最近低学年のスタッフがすごく増えてきたので、いろいろ会議の進め方を変化していかなあかんねと話しています。

やっと、ミニ☆大阪の様子ですね。オープニングやハローワークの雰囲気はこんな感じです。工房とリメイク工房。その服にクール系とかキュート系とか〇〇系と注文をしたら、工房の人がお洋服を作ってくれたりとかします。新聞社は時々スクープがあります。たとえば「びっくり！銀行って、だいたいひま！」っていう（笑）。これはスター☆フードというフードコートで、子ども達がどうしても食べ物をやりたいということでミニ☆大阪には料理のブースがあります。これを見るとすごいお金持ちに見えるんですけど、このクリームは実は限定4個だけとか（笑）。結構、やりたいことを予算内で納めるためにみんなで工夫しています。そしてこれなんか分かりやすいんですけど、キッチンには大人、つまりボランティアさんがたくさんいるんですね。なので子ども達は、洗い物までしっかりしてなかったら「言いたいことだけ主張して」と言われることを先読みして、洗い物は「シャボン堂」という仕事にしておこうとか、「早くパックつめや〜」と言われたら嫌だから「ラッピング屋」をつくらうとか。仕事をつくることでのりこえたりもしました。で、中でも最大の大人対策が、キッチンテーブルごとにある壁に、実はいくつも子どもがかいたレシピがはってあるんですね。これは、当日あそびに来た子にとって、子どもと大人の関係はどうとかっていうこだわりは、そんなに重要ではないようなので、すぐにボランティアさんに聞いて簡単にやってもらっちゃう子が多い年があって、子ども実行委員が「これはいけない！」と。で、当日のボランティアさんの説明会では、「もし、キッチンにはじめてきた子どもが作り方などを質問したら、貼ってあるレシピを指してあそこに書いてみたいよと場所を知らせてください。それでも困っていたら、近くの子どもにおしえてあげてとつないでください」というお願いの方法を子ども達が見出しました。

これは起業の風景です。うちは起業がとっても人気があって。最近、2日目のために、ピカピカ電球が光るガチャボンマシンをつくってくる子がいたりいろんな子がいます。開場は9:30なのに、土地を絶対買いたい子ども達が、朝の8時くらいから会場前に並んだりとかして楽しみにしてくれてます。そのほかに、これは名言博物館ですね。劇場がある年もあり、これは美星神社です。この神社はナンセンスで面白いんです。神社でくじ引きを引いて、大凶とかがでると処方箋をもらえ、フードコートにいくと薬がもらえとか。あとスパイの仕事、これは映画館かな。この映画館のエピソードもおもしろくて。映画をつくろうといって、事前にめっちゃ時間をかけて台本を書いていたのに、当日、お仕事にきた子ども達は誰も顔を出したくないと言って。急遽パイプサートにしたりとか。かと思ったら子ども実行委員の一人が「ミニ☆大阪の当日を楽しみにしてほしいから、手作りで招待状つくってきていいですか？」と言ってきたので「いいよ〜」といたら、こんなすてきなのをつくってきてくれて！まあみんな、好きな事をされています。

これはやっと知事誕生っていう場面です。「もしミニ☆大阪に知事が生まれたら今まで積み上げてきたものが独裁的に持って行かれるんじゃないか」という初代実行委員たちの思いがあって、実はうちは知事制度がなかなかできなくて…。やっと2年ほど前に生まれました。

左下が初代の知事なんですけれど。最初に大人実行委員長に「あなた達はスター（お金）、いくらもらっているんですか？」と聞いてくれ。「いやー、実は大人はスターは貰えないんだよ」って言ったら「こんなにしてくださるのに…」って言って、親切な知事は、大人一人ずつに300

スターずつ給料をくださって…。という風に、これまで子ども実行委員会では、話題にあがらなかったことが解決される(?)場面もありました。

図にしてみました。変わったもの、変わらなかったもの、子どもが育つ、ミニ☆大阪から広がる、大人との関係が緩む、子どもと大人とのパートナーシップ、、、特に、このあたりが、最近変わってきたかなと思います。

例えば、この写真。私が下の子を4年前の2月に出産したんですが、3月の開催にこれるかな～というとき「もう、安心して産んどいて。こっちはやっというてあげるから」って育った子ども達が、いつも以上にいろんなことをひきうけてくれて。ミニ☆大阪をがんばって動かしてくれました。今では、ミニ☆大阪の活動で育った子ども達の中から、私の今の職場、子ども情報研究センターの主催事業「子どもの楽校」「子ども編集部」を手伝いにきてくれる子もいて、子ども参加という分野において、活躍の場が少しずつ増え、広がりが出てきた気がします。その小さな広がりには互いに影響しあい、結果“子どもの声でなにかが動く”という仕組みのあそびを子ども達と創りだせました。

地域の大人達も、成長する子ども達の姿に、今では「子どもの事は子どもに聞けばわかるよね」っていうふうに、子どもへの理解が変わってきたかなと思います。

なお、ミニ☆大阪はまちをつくるけど、子どもの楽校は「あったらいいあの授業」をつくります。ミニ☆大阪では、おとなは堂々とおとなとして存在ができないんですけども、楽校は先生を頼まれたら、おとなが専門家として堂々と入れます。実は、呼んでくれたらいつでもひと肌ふた肌ぬげるよって専門家スタッフでミニ☆大阪も一応かためているんですけど「その技を貸して」って子ども達に言われないんで、常々もったいないな～と思っていたので、子どもの楽校では仕組みを少し変えました。“あったらいいな”の授業をイメージした次にプランナーの子ども達は「自分たち子どもが先生をしたいか。だれか先生になってほしい大人をよんでくるか」を選びます。この前の楽校の時にはサーカスの人をお願いしたりとか、USJの人に来てもらったりとかが実現しました。子ども達の方も、その事業でできる可能性を最近は使い分けていているようで。だからその分、ミニ☆大阪は子どもがつくる子どものまち、、、というところに徹底的にこだわっておられます。

これは育ってきたものです。新しい事業をはじめるとき、ミニ☆大阪の子が手伝いにきてくれたら、私は子どもの声を上手に聞いてくれたりするのですごく頼りになります。これはある楽校のある風景なんですけど、小学生の男の子に「ちょっとなにか、お願い」って、すきま時間のつなぎをまかせると「あ～ミニ☆大阪みたいにしたらいいの?」と問い返し、あうんで場を動かしてくれました。

育ってきたものは上げ出すと、きりがありませんが、中でも一つあげるなら、それは「関係が緩む」ってことかなと思っています。一番初めにめちゃくちゃ怒っていたおばちゃんが、今はとってもミニ☆大阪のことを応援してくれています。数年前、助成金を取らずに運営をしようかという相談をしたとき「ボランティアさんへの交通費が払えなくなる。だったら代わりに私が昼ごはんをみんなに作ってふる舞ってあげる。だからここで辞めんと、もうちょっとこの活動は続けてみたら」って、応援してくれ、活動は今に至っています。

最後に「子どもの言葉から活動の意味を見出す」です。先日、小学校1年生の頃から来ている現中学校2年生の子をつれて、私は某子どもフォーラムに参加しました。そのフォーラムは、施設も環境も非常に整っていてとても立派でした。で、その子に「こんな立派なことができたすごいね。うらやましいでしょ。ミニ☆大阪はアットホームやもんね…」と言ったら「ぜんぜんうらやましいなんて思わない!」とさらっというんです。そして「私の地域には1年生の時からミニ☆大阪を開いてくれる大人がいた。ミニ☆大阪を毎年春休みに開いてくれる大人がいたから、どこにも行けない春休みがあっても、私はいつも楽しかった。ありがとう」って。その瞬間、細々とですが、この場をつくってこれてよかったなあと思いました。

と、時間ですね。この先はまた懇親会でお話したいと思います。
どうもありがとうございました。

全国こどものまちサミット in 静岡 こども会議 ー全国から参加したこどもたちによる話し合いー

進行役 静岡市 宮城島 清也
補佐 ま・あ・る 館長 井野 恵

みなさんこんにちは。

これから、こどものまちサミットin静岡の子ども会議を始めさせていただきます。
わたくし、本日ファシリテーターを務めさせていただくことになりました宮城島清也と申します。
せいやくんと呼んでください。…（せいやくーん！）
ありがとう！

今日、書記を補佐してくれます、館長の井野さんですけど、
なんて呼びますか？

「めぐちゃんと呼んでください。」…（めぐちゃーん！）

なんとなく、めぐちゃんって感じするでしょう。
ちょっと、歳はいいませんけど。



ぼくがどんな人かってことをちょっとだけご紹介したいと思います。
ぼくは静岡市役所の職員で、ま・あ・るの市役所の職員ではなくて、市役所の職員です。
このま・あ・るをつくった時にいろんな大人の人たちとか子どもの皆さんとか、あと大学の先生とかね。
そういうみなさんに意見を聞いてま・あ・るをこういうまちにしよう。って意見を整理して考えてつくる
ことを担当していました。
いま担当から外れてしまっているんですけども、お前つくったから、ちょっと来て話をしろというこ
とで最初呼ばれたんですけどね、いつの間にか子ども会議のファシリテーターになってしまいまして、
久しぶりに子どもたちと作業ができるということで楽しみにしています。

今回のこども会議の趣旨ですが、全国から大勢の方が集まっています。高知や、さっき発表のあった仙
台からも来てくれています。みんながそれぞれいろんなまちをつくっているんだと思いますので、紹介
しあってくださいね、さっき紹介したのは3団体ですけども、もっといろんな人に紹介してもらって
お互いの参考になったらいいなということがひとつ。あと今日のテーマとして大人の関わり方について
ちょっと話し合ってみたいと思います。後ろで聞いている大人の皆さんも、これから子どもの意見を聞
いてもらって、考えてもらって、みなさんそれぞれのこどものまちを良くしていく。そういうきっかけ
になったらいいなというふうに思っていますのでよろしくお願いします。

今日の進め方ですけども、旗揚げアンケートという方式を使って進めていきたいと思います。
今日は3つほど質問を用意してきましたけれども、これからぼくが前の方に座っている子どもたちに質
問をします。
自分が一番当てはまっていると思う色の旗、1が赤、2が黄色、3が緑、4がピンク、5が青。
旗を一斉に掲げてくださいね。

ぼくとめぐちゃんが数を数えますので、いいですよというまでは揚げといってくださいね。
数を集計したら、その集計した結果を見ながら、みなさんを当てていきますので、どうしてそれを挙げ
たのか理由や思いをお話しいただければと思っています。

じゃ最初に練習と自己紹介を兼ねて1問目をやってみたいと思います。

1問目、どうしてこどものまちに参加したの？

みんな参加したでいいんだよね。参加していない子はいないよね。

どうして参加したのって質問です。

- 1.おもしろそうだったから（赤）
- 2.ともだちが参加するから（黄色）
- 3.うちのひとにすすめられて（緑）
- 4.学校の先生にすすめられて（ピンク）
- 5.その他（青）

どれか1つだけ掲げてくれるとうれしいな。

複数の場合もあると思うんですけど、1番当てはまるものを掲げてください。

いいですか。じゃあ掲げてください。お願いします。

はい、ありがとうございました。

結果は

- 1.おもしろそうだったから が一番多い 8人
- 2.ともだちが参加するから がなくて 0人
- 3.うちのひとにすすめられて が7人
- 4.学校の先生にすすめられて が1人
- 5.その他 が2人でした。



1つ目の質問は全員に答えてもらおうと思っています。

順々に当てていくので、自分が参加しているこどものまちの名前と自分の名前、自分がどうしてこどものまちに参加したのか、自分のまちのこんなところが面白いよとかのアピールを一言ずつお願いします。

その他（5番）からいこう！

「静岡市こどもクリエイティブタウンま・あ・る の向山素生です。よろしくお願いします。

ま・あ・る は子どもが中心となって、まなんであそんでつくってお店を運営する楽しいまちです。

なぜ、その他にしたかという自分ま・あ・る とその前のミニ静岡というまちにも参加したんで

すけれども、ミニ静岡はいろいろあって面白そうだったというのが一番だったんですけれども、

ミニ静岡に参加して、その流れでま・あ・るがあって、自分がミニ静岡でやってきたことが培って、

ま・あ・るでも働いてみたかったのでま・あ・るに参加しました。」

はい、ありがとう。

ま・あ・るを代表して当てさせていただきましたけれども向山君はこのま・あ・るのキャラクターも考えてくれた子です。素晴らしい。「決まったよ」って向山君の家に伝えに行ったら50個くらい考えた案を見せてくれました。その中から一番いいの出してくれて…見事に採用されました。

はい、つぎ。

青（5番）、どうかな。

「えっと、すごく後ろを向きづらいんですが、高知から来ましたとさっ子タウン実行委員の大野です。なんでお前そこにいるんだってすごい声が聞こえてきそうなんですけど、別に自発的にここに座ったわけではなくて一応、学生って立場で子ども側、子ども寄りな大人…で参加してこいということでここに副市長と一緒に座らせてもらっています。高知の大野悠里です。よろしくお願いします。自分は市民として参加していないので、その他にさせてもらいました。とさっ子タウンの良いところは、子どもも大人も距離が近くて、こうやって今日も高知から静岡まで副市長と来れたというのも良いところではないかなと思います。よろしくお願いします。」

はい、ありがとうございました。

順番に当てていきますが、発表がづらいなって思った子は所属とお名前だけで結構です。

よろしくお願いします。

では、ピンク（4番）の彼女、お願いします。

「キッズタウンぼくらのまちのはらから来た竹内沙羅です。良いところは大人のスタッフさんが手助けしてくれて楽しく運営できたことです。学校の先生にすすめられてなんですけれども、いま中3で、内申書みたいなやつに書いてもらってるということで、参加しました。」

はい、ありがとう。

そんな、良い学校もあるんですね。

広めたいくらいですね。

今度は3番（緑）どうぞ。

「こどものまち・みずほという愛知県から来ました高村環です。こどものまち・みずほの良いところというよりは愛知県の良いところなんですけど、愛知県はすごくこどものまちが多くて、名古屋市なんですけれども区に1個くらいの割合であります。多いところがあるので、周辺の市からもお客さん、子どもが来て、近くなんですけれども同じようにやることも多いので同じ友達といろんなまちを繰り返してできる場所がいいところかなと思います。よろしくお願いします。」

はい、ありがとうございました。

「同じ愛知のながれランドから来ました松田結衣です。

ながれランドは他のこどものまちと違って、来た子の全員が自分でつくって、それを問屋に出して販売するってかたちのこどものまちになってて、とても面白いです。」

はい、ありがとう。

「同じく愛知、名古屋市から来ました、さっちゃんこと鈴木桜子です。

私は主に所属しているのは名古屋子どもシティというまちで、名古屋子どもシティは名古屋市全体の各区でやっているこどものまちの子たちが集まって大きなものをやるというふうなまちです。わたしがなぜ緑の旗（3番）、おうちのひとにすすめられてを揚げたかということ、私はいま高校1年なんですけど小学4年生の時に母親にすすめられて始めました。それで楽しいのでずっとやってます。以上です。」

はい、ありがとう。

「名古屋子どもシティからきました近藤みずほです。

良いところは多くの人が集まって自分の好きなお店が出せるのがいいと思います。」

はい、ありがとう。

次はこのへんかな。

「牧之原、キッズタウンぼくらのまちのはらから来ました石川舜です。

キッズタウンぼくらのまちのはらの良いところは、何回かミーティングという会議をしていながら、細かいところなどをいろいろと子どもたちだけで決めているので、すごい、思う通りにできているので満足できる、結果に満足できるってところだと思います。」

はい、ありがとう。

つぎ、お願いします。

「エンジョイスマイルさがみから来ました伊豫田遼花です。

エンジョイスマイルさがみの良いところはこどものまちの取組の紹介で出た通り、大学とコラボしているところで、とても特徴のあるまちです。なんで緑（3番）を揚げたかということ、もともとお兄ちゃんがやっていて、わーっ！面白くなって思って、家の人にすすめられてやってみました。」

はい、ありがとう。

大学とコラボって言葉が出てきて素晴らしい。

お願いします。

「宮城県仙台市から来ました。こどもがつくるまち Piccoliせんだいの齋藤ほのかです。

わたしが始めたこのPiccoliせんだいは毎月ピコせんキッズという代表的な会議があっていろいろなルールを決めて参加できるのが良いと思います。緑の旗（3番）を揚げたのはお母さんが代表をやっていて、それにやって楽しいと思ったからです。」

はい、ありがとう。

受け身な参加のしかたかなと思っていたんですが、ぜんぜん違いますね。
すごくしっかり考えているし、すごくしっかり参加しているのがよくわかりました。
ありがとうございます。
じゃ赤（1番）に行きましょう。

「ミニヨコハマシティから来ました百崎佑です。
ぼくがどうしてこどものまちに参加したかという、もともとはお客さんとして来ていたんですけど、小学生の時に学校でもらった手紙がこどものまちのあれで、面白そうだなって送ったんですけど、最初はぜんぜんそういうスタッフがあるって知らなくて普通に何年かはお客さんで来ていたんですけども、主催している人からやってみないって感じで言われて参加したっていうのがきっかけなんですけど、面白そうだなと思ったので参加しました。」

ありがとう。

「綾瀬市こどものまちミニあやせから来た山下良夢です。綾瀬市ミニあやせのいいところは毎年800人以上が来て、とてもにぎやかなまちです。どうして赤（1番）を揚げたかという、今年で3回目なんですけど、いままで3回とも実行委員をやっていて、1回目の初めての時に自分たちでまちをつくれなくて、でも面白そうだなと思って実行委員になりました。

はい、ありがとう。

「同じく綾瀬市こどものまちミニあやせから来ました藤嶋和音です。
ぼくは赤（1番）を揚げたんですが、僕自身、みんなを引っ張るということが好きで、いま中学2年生なんですが生徒会をやっていて小学校のときも学級委員とかをやって、そういうのが好きだったんです。
それでちらしを貰ったり、市役所の人からこういうことがあるんだって話があって、それはとても楽しそう！って話があって参加をさせていただきました。
いま、とても楽しい。もう3回、ずっと、全部、実行委員をやらせていただいているんですがとても楽しい思いをしています。」

ありがとう。

同じく綾瀬市こどものまちミニあやせから来ました高橋乃愛です。
わたしがなぜミニあやせをやろうかと思った理由は、まず本当に単純に、募集がかかっているの、あっこれなんか珍しい、面白そうって思って始めて、私も3回とも全部やっているんですけど、ずっと楽しくやらせてもらって、ミニあやせの良いところは知らない人とも交流できるし、あんまり会わなかった子とも再会できたみたいな感じができるから、そういう交流の場で、良いと思いました。

ありがとうございます。

「同じく綾瀬市こどものまちミニあやせから来た松下真優です。
私は最初はおうちのひとにすすめられたんですけど、最終的に決めたのは、面白そうだったからということで赤（1番）に揚げさせてもらいました。
ミニあやせの良いところはとにかくいろんな人が来て、すごく楽しいところだと思います。」

はい、ありがとうございます。

順番来ちゃったけど…いい？

「とさっ子タウンから来ました兼子陽樹です。

とさっ子タウンの好きなところは、いろいろなお店があっていろんなものが買えるところです。
なんで赤（1番）に挙げたかという、最初にちらしを見た時は、なんか面白そうだなって思った。
そういう自分のまちみたいなのが好きで、それで面白そうって思って応募したんで赤（1番）に挙げました。」

素晴らしい。ありがとう。

「名古屋子どもシティから来ました近藤めぐみです。

名古屋子どもシティの良いところは事前に会議があるんですけど、その時に私はしくみとか考えていないんですけど、当日に私がとくにやり易い、いいしくみになっているので、そういうところが好きでやってます。

おもしろそうだったからの赤い旗（1番）に挙げたのは、最初は名古屋子どもシティからも行って、ピンポン横丁って場所で親にすすめられてやっていたんですけど、名古屋子どもシティは面白そうだったからという理由で入ったので赤（1番）を挙げました。」

はい、ありがとうございました。

お互いにどんなふうに考えて、どういう思いを持って参加しているんだなっていうことがわかったかなと思います。

こんなふうに今日はすすめていきたいなと思っています。

次はね今日の本題に入りたいと思います。

このテーマで語り合うのはきつい？

後ろにいる大人たちは「いも」だと思って、いないと思ってしゃべってくださいね。

こどものまちの宿命ですね。

必ず横に大人がいますよね。

みんないろんな思いを持って参加していると思いますけど、実際に参加している中で大人の関わり方についてどういうふうに思っているか、っていうことをちょっと聞いてみようかなと思います。

これは全員は当てません。

答えたくないって人もいると思うんで全員には当てません。

あと、ひとつだけに当てはまんない場合もあると思うんで複数掲げてもかまいません。

複数の旗を掲げてもかまいませんので自分の思っていることを掲げてください。

1.もっと自由にさせて欲しい。ああだこうだ言わないで欲しい。もっといろんなことが出来るようにして欲しい。と思う人は赤。

2.裏がありそうでこわい。

この質問立ては、ま・あ・る のこども店長さんに聞いて作りましたんで、あの、これ、どうだろう。いいんですよ、これも掲げてくださいね。裏がありそうでこわい。

3.自分たちをサポートしてくれるいい人だ。っていう場合は緑を掲げてくださいね

4.いろんな人、大人がいるから一言で言うのは難しい。なんか大人っぽい回答です。これはピンクを揚げてください。

5.ちょっと当てはまんないよって人はその他の青を揚げてください。

ちょっと考える時間をおこうかな。

裏がありそうってどういうことかな。

ぼくスタッフじゃないけど井野さんはたぶん裏があるんだよ、そういうふうに言われちゃうんだよ。ちょっと気を付けましょう。

はい、揚げてください。

結果ですけど。

1のもっと自由にさせて欲しい。というような意見の人は5人。

…なに、気にした？

…大人への配慮ですか？

3の自分をサポートしてくれるって人は7人

4のいろんな大人がいるから一言では難しいは12人

5のその他が1人

で 2の裏がありそう、こわいはありませんでした。

本当？

意見を聞いていきたいと思います。

最初にその他の5番（青）の人に聞いてみようかな。

その他はどんな意見ですか？

「こども会議とかで一緒に考えて手伝ってくれたりしてくれるので、仲間みたいな、楽しい人たちだなと思います。」

ありがとうございます。

このいろんな人がいるから一言では難しい。これを選んだ子は、たぶんいろんな思いがあって、選んだと思うので、どういう思いで挙げたのか聞いてみたい。ピンク（4番）揚げた人で、いいだいてって人いますか？ そこでにこにこしている人、どうですか？

「いやー本当にいろんな大人がいるなって思って。

もちろんミニヨコの大人スタッフの人は、なかでも自分をサポートしてくれる大人の人にあたるかなと思うんですけど、なかなかこどものまちって言っても金銭的な面とか大人のサポートがなければ、できない部分があるので、そこを子どもの意見を聞きながら実現してくれてる大人は本当にありがたいなと思っています。いま、ミニヨコの市長のお母さんはすごく過保護なお母さんで実は市長の子はその過保護から逃れるためにこのこどものまちに参加したという。去年のサミットでも言ったような気がするんですけど、1時間に1回くらいメールをしないと安否確認みたいのをしないと気がすまなくて、しかも恋愛は大学生になるまで禁止みたい、まるでAKB教育か。…みたいな。そんなお母さんで、いつかミニヨコに参加して、自分は大丈夫だよみたいな感じで、そう思っ

てくれればいいなと思って参加するようになって、ほんといろんな大人がいるなって思ってます。
以上です。」

はい、ありがとうございます。

ちょっと、ファシリテーター的には想定外なディープな話をしていただいて、もうちょっと想定内だといいなと思いつつも、実際そうなんでしょうね。きっとね、そういう子もたぶんいるんだと思います。過保護をなんとか逃れたいみたいなね、あるんだと思います。

「いろんな大人がいるから…難しいというのは、子どもの会議とかやるときに結構そういう大人が出てくるんですけど、ある大人からこうしたらどう？みたいなことを言う大人とかいるんですよ。それ結構いい案だったりしていいなと思ったりしていると別の大人にそれだめだよなって言われることがたまにあるんです。ちょっと難しいなって感じてます。」

はい、なるほど。

いろんな大人の方が参加しているので、同じまちのなかでもひとつのことについて、それいいじゃんって言う人とそんなんできないだろう、だめだろうって人が両方いて困ると、そういうことですかね。

あーっ、なるほど。

思い当たります？後ろの方、運営していると。

そうですね。

支える人が多くなると必ずこういう問題が出てきますよね。
それを子どももちゃんと見てるよって、そういうことですよ。

あとピンクで（４番）どうですか。
なんかピンク（４番）面白そうですね。

「ぼくはピンク（４番）と同時に赤（１番）も同時に揚げてるんですけど、ピンクの人、みなさんは同じだと思うんですけど、いろいろ言ってくるとかそういうのあると思うんですけど、前回の会議で話して、今回の会議で前回の会議のあとに大人会議みたいなのであったらしく、今回の会議でなんか話が違ふんじゃないかなって感じる時がちょいちょいあったんで、これはなにがあったのかなって思う時があるので、そこはどうなんだろうなって後ろに大人がいるんで…」

話が違ふって、どういうこと？

「大人会議でなんか話し合ったんじゃないかなって。」

子ども会議で話し合ったことと、いつの間にか話が変わっちゃっているってこと？
あれって感じ。

「あと、お父さんが実行委員会にいるんですけど、それを言うとあれっ違ふじゃん。」

なるほど。

はい、ありがとうございます。
これ以上突っ込みませんけど。

そうですね。そういう思うことがあるってなんとなくわかります。

「わたしもほぼ一緒の意見になってしまうんですけど、今年の名古屋ミニシティで前に立って実行委員のみんなの会議をまとめるみたいなことをしてたんですね。

もっと前に出ていいよ。もっともっと大人が入らなくていいよって言ってくれる大人とぼく、わたしがやるからマイク貸してって言うてくる大人の両方がいてっていうことがあって、いろんな大人いますねっていう話です。でも、わたしをもっとこうしたらいいよってサポートしてくれる大人の人が多いので、私は緑（3番）も一緒に掲げています。以上です。」

ありがとうございました。

なんとなくこのピンクは色が赤に似ているのか赤よりなご意見が多いかなって考えてますんで、ちょっと赤（1番）の人にも聞いてみようかなと思います。

何色だったかな？

茶色？

赤だよ。なんか一言どうぞ。

どんなこと自由にしたい？ 逆に自由にならなかったことってどんなことかな？

いろいろ？

難しいかな？

よし、わかった。じゃ代わりに答えてくれそうな人。

「わたしは赤（1番）とピンク（4番）を一緒に掲げたんですけど、ピンク（4番）もそれぞれ、いろいろな個性のある大人の人もいるし、いろいろな個性のある子どももいるわけだから、正直頑固な大人もいれば、普通に話してくれる大人もいたりして、いろいろあるんで、その中でうちらの子どもの意見と大人の頑固な人とかの意見が食い違っちゃったりして、そういうことでどうしても大人の意見が可決されちゃったり。そういう時にはもっと自由にやりたいなって思いました。」

はい、ありがとう。

あと、どうしても言っておきたい人いますか？

これで一通りこの質問については終わろうと思いますが、いいですか？

そうですね。

わりといろんな大人がいるみたいなのご意見が多かったのかな。

どう、いろんな大人がいて。

いい案を出してくる大人、それを否定する大人。こういうの困るよね。

言っているのが違うってのはね。

それから1回決めたことが後でひっくり返る。そういうの困るよね。

できること、できないことっていうのは、なんとなく、みんなわかっているのかな。

ここに来ているみんなはね。普通に参加している子はわかんないんですけど、ここに来ている子はある程度わかっていて、自分たちなりにできるように、やりたいことをやる。っていうのがなんとなく伝わってきたのかなと思います。

ただ大人の側がひっくり返しちゃったりとか違うことを言ったりとか、そういうのに戸惑うようなことが今回わかったのかなという感じがします。

という僕のコメントに対して言っておきたいことありますか？

どうですか？

今日のメインのテーマ、大人に対して思うことについては、今日特別に答えを出す場ではありませんのでこんなふうに整理させてもらって終わろうかなと思います。

最後にもう1問だけ質問させてもらって今日はおしまいにしたいと思います。

はい、今回は簡単ですよ。

このこども会議、どうでした？

- 1.むずかしかったって思う人は赤
- 2.つまらなかったよって思う人は黄色
- 3.もっとじっくり話をしたかったっていう人は緑
- 4.いろんな意見が聞けてよかったという人はピンク
- 5.その他が5番（青）です。

はい、じゃあ揚げてください。

遠慮しないで自分の思った旗を揚げてください。

今日の感想ですけれども、

- 1.むずかしかった が3人
 - 2.つまらなかった が2人
 - 3.もっとじっくり話をしたかった が3人
 - 4.いろんな意見が聞けてよかった が9人
 - 5.その他 が2人
- でした。

その他の子、

なに？その他って。

「まず、いろんな考え方があるんだなって思って、大人についての考え方について、考えられる機会になったし、これを機に大人への接し方をちょっと考えてみようかなと。」

すごーい！

素晴らしいですね。

いやー、今日の結論みたいな感じでね。

良かったです。ぼくまとめなくてよくなっちゃって、すごく感謝しています。

はい、ほかにもういいですか？

いまのに触発されてやっぱりひとこと言っておきたい子いますか？

いいですか？

じゃ、これで今回のこどものまちサミットin静岡のこども会議を終わりたいと思います。

参加してくれたみなさん、ありがとうございました。

全国こどものまちサミット in 静岡 閉 会

次回開催地へ横断幕の授与を行いたいと思います。
2016年全国こどものまちのサミットの開催地は、神奈川県相模原市に決定いたしました。
横断幕の授与を行いますので、相模大野のこどものまち実行委員会のみなさんは前へどうぞ。
2015年の開催地、静岡市より次回開催の相模原市へサミットの横断幕の授与を行います。
どうぞ。お願いいたします。

来年10回目になりますが、相模原市よろしくお願いします。

それでは受け渡しが終わったところで、相模大野のこどものまち実行委員会の皆さんから一言いただきたいと思います。
よろしくお願いいたします。



『記念すべき10回目とは思っておらず、つつい相模原で取ってしまいました。老舗のこどものまちの主催者の皆さん、申し訳ございません。来年は8月の13、14日、相模女子大学で行います。皆さん予定の方をよろしくお願いします。これから委員長に、ご挨拶をさせていただきたいと思います。来年は相模原市へ全国サミット来てくださいね。よろしくお願いします。』

ありがとうございます。
最後に閉会の挨拶をお願いします。

この ま・あ・る を所管しております静岡市の産業政策課の青木でございます。
本日は全国から、こどものまちサミットin静岡へお集まりいただきまして、まことにありがとうございました。静岡市のサミットはいかがでしたでしょうか。
こども会議は大変盛り上がりましたね、木下先生の話も面白かったと思っていますところでございます。
ここで出された意見や考えを、それぞれのこどものまちへ持って帰っていただいて、そちらのほうで上手く反映していただければと思います。
なお、明日も交流バザールが企画されておりますので、ご参加いただける団体の皆さま方は、引き続きよろしくお願いいたします。

ここでせっかくなので、静岡のまちを紹介させていただきたいと思います。
ここが清水区といいまして、すぐそばに清水港があります。この港はマグロの水揚げ日本一です。そこから少し南への方へ行きますと、世界文化遺産の富士山の構成資産の三保の松原がございます。西側へ行きますと日本平という景勝地があり、そこからロープウェイで国宝の久能山東照宮へ渡ることができます。JR静岡駅の南側は駿河区で北側は葵区となっております。駿河区の方はみなさんも教科書等で習ったと思いますが、登呂遺跡があります。葵区の方は徳川家康公が幼少期や晩年過ごされた駿府城蹟、いま駿府城公園と言いますがございます。南アルプス、ユネスコエコパーク、子ども向けの施設として静岡駅の南側のところに、静岡ホビースクエアがあります。静岡市の地場産業には、プラモデル産業があり、盛んなものですからタミヤ、アオシマ、ハセガワ、ガンダムのバンダイなど、それらの情報発信をしております。そのビルの横には静岡科学館がありますので、時間がありましたらお寄り頂ければと思います。お土産などもJR静岡駅の周辺にございますので、経済局として大変助かります。
本日はいろいろとありがとうございました。

以上をもちまして、本日のプログラムをすべて終了いたします。

全国こどものまちサミット in 静岡 こどもバザール～こどものまち特設店舗

● こどもがつくるまち「Piccoli せんだい」

ピコせん2015「エコ&スマイル」
エコ&スマイルは今年度のピコせんのテーマです。
身近なものを使用し簡単に自分の好きなものが出来て
「スマイル」になる雑貨をま・あ・る通貨で販売します。

出店団体
仙台市
NPOピコせんサポーター

● とさっ子タウン

とさっ子タウンオリジナルのこどもたち手作り品などを
ま・あ・る通貨で販売します。

出店団体
高知市
とさっ子タウン

● ミニはままつ

「ガーベラ」日本一のまち「はままつ」からミニはままつでは
「おはなやさん」を開きます。
おはながみの花、ペーパークラフトの花などをま・あ・る通貨
で販売します。

出店団体
浜松市
ミニはままつ



※個人情報の関係から写真に加工をさせていただいています。

全国こどものまちサミット in 静岡 アンケート回答

- 大人向けの内容と子ども向けのものとは分科会方式で分けた方がよいように思いました。
13:00-16:00の3時間は、子ども達には辛かったのでは？
連れてきた子ども達は、他の子ども達と直接交流できることを期待していたので、その時間がなかったのは残念です。
- <木下先生のお話から>
こどものまちが生まれるきっかけは大人とのかかわりや子どもの活動から広がることが分かりました。
公園などの育てやすい遊び場と地域の理解が必要だと感じました。具体例として「ミニ・ミュンヘン」をあげており分かりやすいお話を聞くことができて良かったです。（ビデオも）こどもの声も聞くことができて良かったです。
- <ま・あ・る>
社員・店長と経験して子ども自身が変化を実感できるというのはとても素晴らしいなと感じました。
子どものうちから責任を持った行動ができるように良い方向へ変わっていけると思いました。
- <ピコせん>
地元の特徴をよく活かされているなと感じました。
- <エンジョイスマイルさがみ>
学生主体で行われることは、かなり大規模だと思いました。
- <ミニ大阪>
ほとんど子どもを主体で動き、大人とも戦いながら進めていくことで深く考えることができるすごい場だなと感じました。
- <講演>
「子ども達が将来何になりたいか」ということについて深く考えたことはあまりありませんでした。
自分が幼い頃はその時に好きな物や、流行っているものによって、なりたい職業がよく変わっていました。しかし、子どもの頃のその様な経験が後々の職業選びに生かされていくのではないかと思います。
幼いころになりたかった職業から自分について見つめ直すことにつながる場合も考えられるので幼い頃に様々な職業に触れ、興味をもつことは大切なのだと思いました。
- <ま・あ・るの活動紹介>
「常設のこどものまち」と「イベントのこどものまち」では良い点が違うということがよくわかりました。
問題点を改善することによって良い点へと変えていけるのだと思いました。
こども店長のブースと大人スタッフのブースをつくることによって、こども店長の負担軽減や受け入れ人数の増加につながっており、どちらも大切なのだと思いました。

<こども会議>

子ども達が自分の考えを話すことができていて、すごいと思いました。子ども達が積極的に考えを話すことによって良い会議ができ、良いまちになっていくのだと思いました。

今回のサミットでは、とても多くのことを学ばせていただき、多くのことを考える機会になりました。ありがとうございました。

- 興味深いお話をたくさん聞くことが出来ました。
それぞれの事例も学ぶ所が多く、勉強になりました。
ま・あ・るのしくみや組織の仕方等
自分自身が関われるところで上手く生かしていければと思います。
来年の相模大野も楽しみにしております。
- スーツの男性に囲まれて監視されてるみたいで、怖くて、イヤでした。
せめて座ってほしかったです。
- スーツを着た人が多くて怖かった。
Tシャツを作ってスーツの下に着るだけでも変わると思う。
もっとわいわいできたら良いと思った。
- 初めて参加させていただきましたが、各地でのこどものまちの取り組み、とても参考になりました。
こども会議での子ども達の思いもとても興味深かったです。ありがとうございました。
また参加できる機会を楽しみにしています。
- いろいろな事例が聞きたいので、短くても多くの発表を聞きたい。
- 木下先生の講演では2つの点が印象に残りました。1つは社会の価値観が目まぐるしく変わる時代に子どもが自由に遊べる場の形式は本当に難しいということです。
子どもの可能性を「時代が悪い」という言い訳で潰してしまわないようにしていくことが最重要だと思いました。
2点目は仮想都市と現実へのリンクのバランスです。現実社会を意識しすぎれば、子どもだけの社会とは何かという問題になり、本当に子どもの声のみを重視していれば社会へのコミットを考える視野が狭くなってしまう。
そんなことを考えて聞いていました。
“ミニ大阪”さんの中で2点が心に残りました。
1点目は「子ども」と「大人」の問題を問い直すという点です。
イベントの運営のシステムなどばかり気にし、そのような根本的な問いには、立ち返れなかったと痛感していました。
2点目は「来年度開催は当たり前ではない」ということです。本当に驚きました。
「子どもが主体」と口では言っている、この言葉に驚いたということは「主体性」の認識が甘かったんだなあと思いました。自主性とは何か、主体性とは何かをもう一度考えてみたいと思います。
- 全国のこどものまちの活動を知ることができてとても楽しかったです。

- 講演会や報告会全体を通して「学校」とこどものまちとの関係はどうだろうかと思いました。

「ま・あ・る」の取り組みを見る限り、コミュニティの場が家庭や学校ではなく「こどものまち」にあることが、とても印象的でした。その時、学校がそのこどものまちに、どれだけ、どのように関わっているのか（例えば相模女子大学などが挙げられますが、小学校や中等学校はどうでしょうか）「こどものまち」の視点から「学校」という空間をどうみているか？といったことを疑問に思いました。他のこどものまちと比較したり特徴をつかんだりすることを通して、私たちの団体の良さや改善すべきことを自覚することができました。

- 本日はとても楽しく参加させていただきました。

いろんな資料を見たり聞いたりして立ち上げましたが、5年やっても毎年反省点があり、迷うこともあるので、このようなサミットで交流できるのは、とてもありがたいことです。

サミット後の交流会も楽しみです。

また、こども会議などの進め方など、参考にさせていただきたいと思いました。

- 全国こどものまちサミットin静岡の成功、おめでとうございます。

2日間 ま・あ・る の取り組みをはじめ、様々な他でのこどものまちの取り組みを知ることが出来、大変勉強になりました。

木下先生のお話、こども会議での子ども達の本音、とても面白かったです。ここまで準備され、このような機会を設けて下さった関係者の皆様に深く感謝致します。

ありがとうございました。



全国こどものまちサミット in 静岡

2015

発 行 2015年10月
発行者 静岡市 経済局 商工部 産業政策課
編 集 株式会社 丹青社

【 無断複写転載を禁じます 】